

第 68 図 竪穴建物 SH1161a 平・断面図 出土遺物実測図

<出土遺物>

後期後半新段階の甕が 1 点出土した。

(22) 竪穴建物 SH1168a

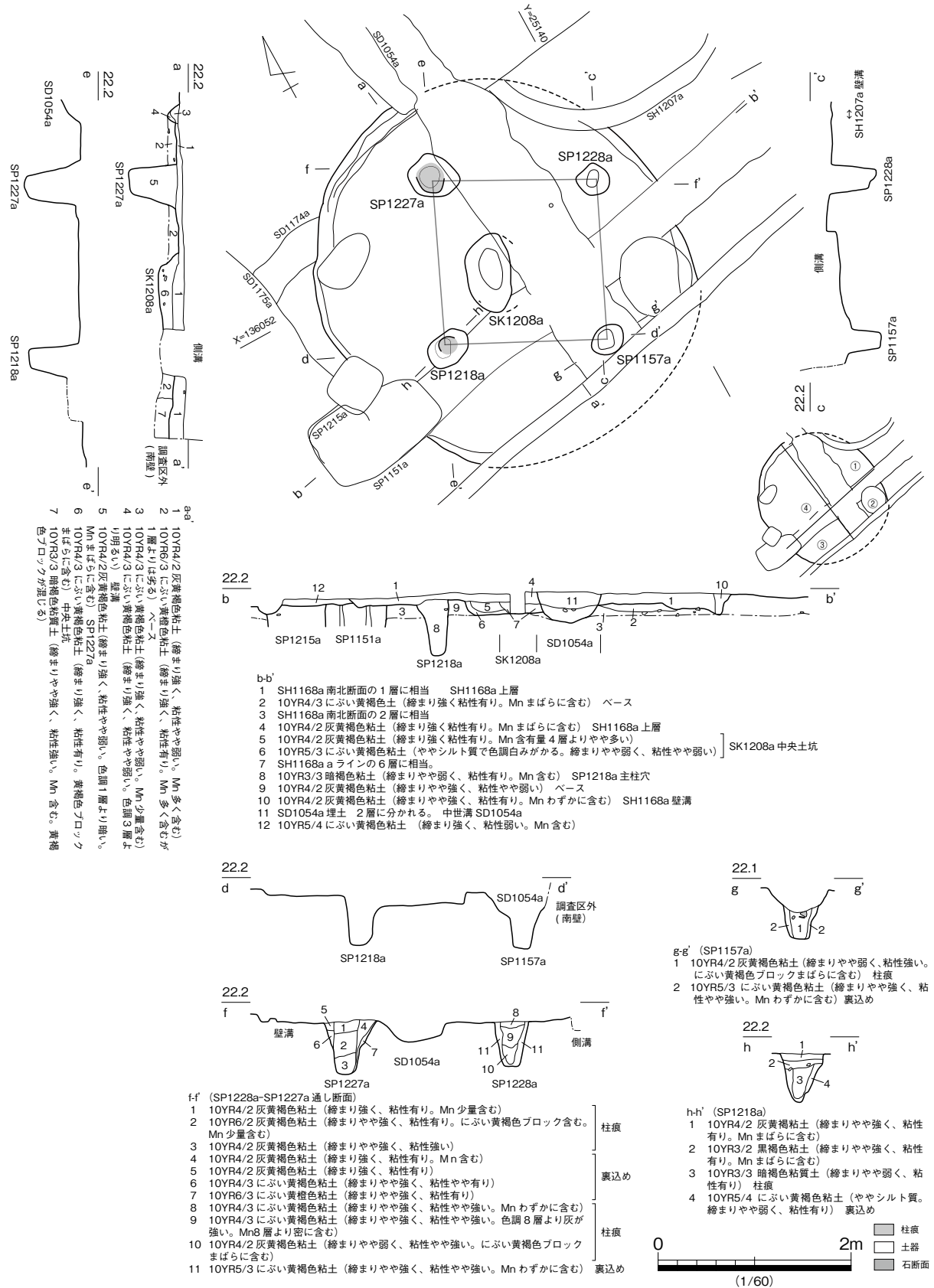
1 区西側で検出した円形の竪穴建物である。直径 4 m で、推定床面積 12.6 m²を測る。主柱穴 4 基 (SP1227a・SP1228a・SP1218a・SP1157a) で中央やや西寄りに中央土坑 (SK1208a) がある。後期前半新段階の竪穴建物 SH1207a の竪穴部に一部切られ、SH1208a とした後期前半中段階の平地式建物と重複する。また中期後半新段階の掘立柱建物 SB1349a の構成柱穴である SP1215a を切る。以下、遺構各部位を詳説する。

検出面から深さ 0.12 m に床面がある。周縁に壁溝が巡りベッド状遺構は伴わない。中央土坑 SK1208a は長さ 0.8m、幅 0.5 m の楕円形土坑で、深さ 0.12 m の埋土は炭化物塊を少量含む程度で顕著な炭化物層は形成しないが、念のため水洗したところ 1.01g の炭化物を抽出し、コナラ属コナラ節の燃料材が同定され、イネ果実 1 点が含まれていた (第 4 章第 2 節 4)。

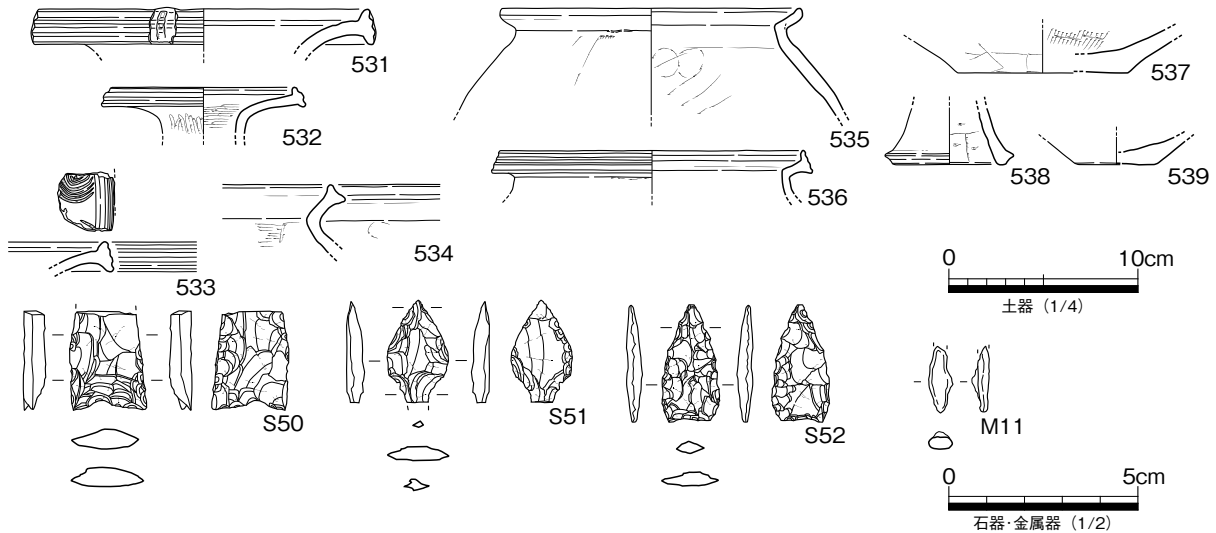
中央土坑の上層 (b ライン 5 層) から竪穴埋土 (同 1 層) は基盤土ブロックを含む埋め戻し層である。主柱穴は直径 0.4 ~ 0.5 の不整円形でいずれも掘削により柱を抜き取っている。床面出土の土器はなく、中央土坑や柱穴から出土した。

<出土遺物>

531 ~ 533 は口縁端部を上下に拡張し凹線文を施文する広口壺である。531 は棒状浮文上にも凹線文を施している。533 は口縁内面に櫛描による円弧文を施す等、中期後半中段階から新段階の特徴をもつ。534 は口縁部が「く」字にカーブして反転する甕で口縁部の拡張があまり大きくない後期前半古段階の特徴をもつ。結晶片岩を含む阿波地域若しくは紀伊地域からの搬入土器である。535 は貼床層から出土した中期後半古段階の甕である。536 は中期後半新段階から後期前半古段階の特徴をもつ口縁上方拡張の甕である。



第69図 竪穴建物 SH1168a 平・断面図



第 70 図 竪穴建物 SH1168a 出土遺物実測図

S50～S52 はサヌカイト製の打製石鏃である。S51 は鏃身部小形で蛇頭形の有茎式である。

M11 は中央土坑 SK1208 埋土で出土した小形の棒状鉄片である。図下端は針状に尖り、上端は欠損する。鉄鏃の可能性はある。

534 の後期前半古段階の甕が主柱穴 SP1218a から出土している。竪穴部埋土の検討から、建物の廃絶にあたっては埋め戻し整地が行われたことが明確である。柱はその際に抜き取られている。柱の抜き取り後、柱穴に流入した整地土にこの甕片が混入したものと推察する。よって建物の廃絶時期は後期前半古段階と判断する。

(23) SH1169a

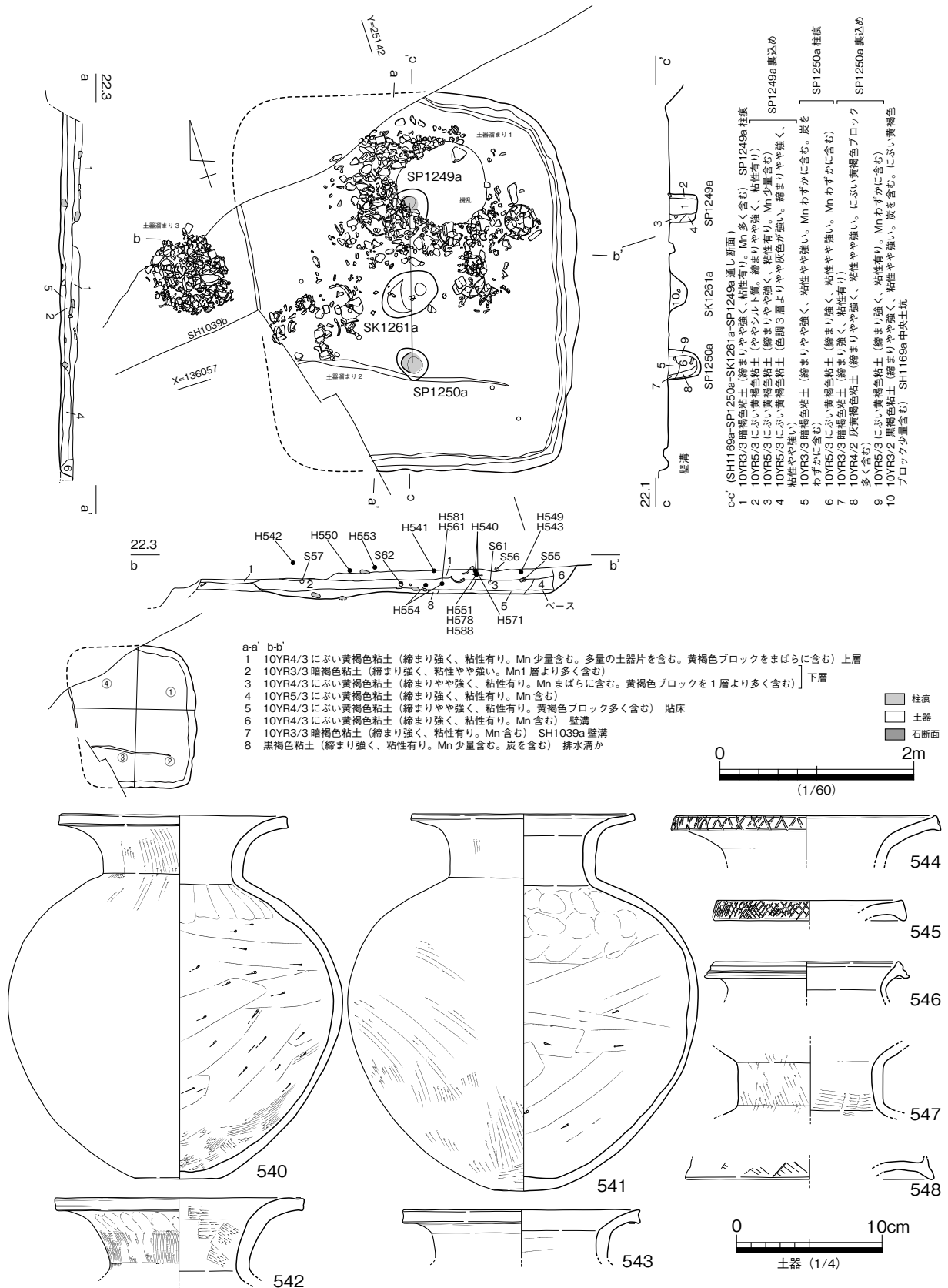
1 区中央付近で検出した方形の竪穴建物である。南北にやや長く長辺 4.0 m、短辺 3.5 m で推定床面積は 14.0㎡を測る。主柱穴 2 基、中央土坑 (SK1261a) が残存する。主柱穴 (SP1250a・SP1249a) は柱間 1.7 m で南側主柱穴から南にベッド状遺構を構築する。床面に多数の土器が投棄されており、竪穴建物のプランを確定する前に土器溜り 1・2 として取り上げられていたものである。同一面で土器溜り 3 としていた一群は隣接する SH1039b に所属するものとして既に報告した。SH1039b とは重複関係があり、本建物が切られている。以下、遺構各部位を詳説する。

検出面から 0.25 m 掘り下げ、厚さ 0.04 m の貼床を設置して床面を構築する。南側のベッド状遺構は a ライン 4 層の貼床で構築する。主柱穴は直径 0.4 m の円形で柱は廃絶時に抜き取る。中央土坑 SK1261a は直径 0.4 m、深さ 0.15 m の円形土坑で、炭化物を含む黒褐色粘土で埋積する。水洗抽出した 6.94g の炭化物中にコナラ属コナラ節、クスノキ科、コナラ属クヌギ節の燃料材が同定され、モモ核 2 点が含まれていた (第 4 章第 2 節 4)。

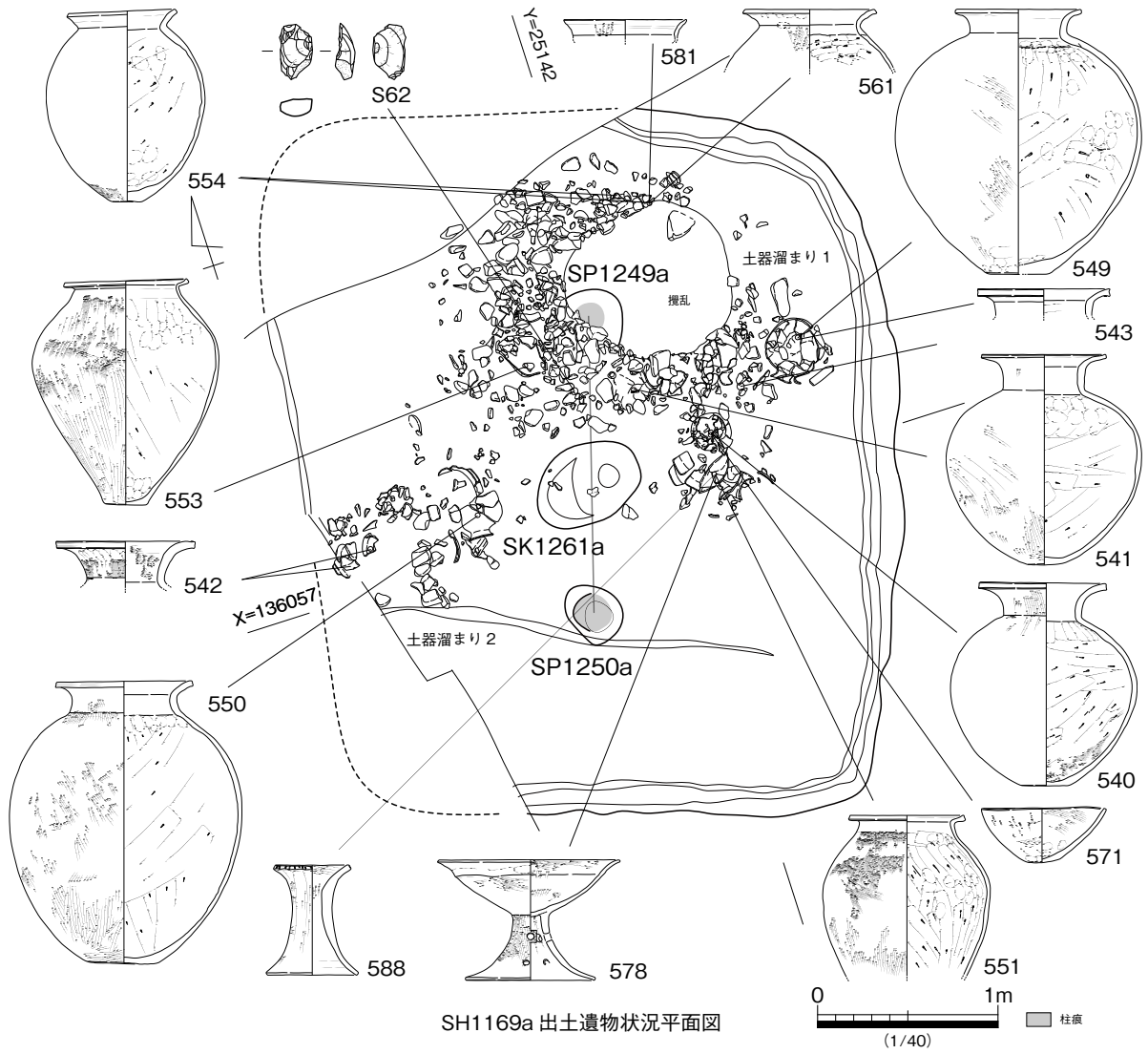
竪穴部埋土の下層 (b ライン 2・3 層) は基盤土ブロックの入り方がまばらで意図的に埋め戻したのではなく、ある程度時間をかけて自然埋積し、その後土器溜りを形成した一括投棄と上層 (同 1 層) の埋め戻しが行われたものと推察する。

<出土遺物>

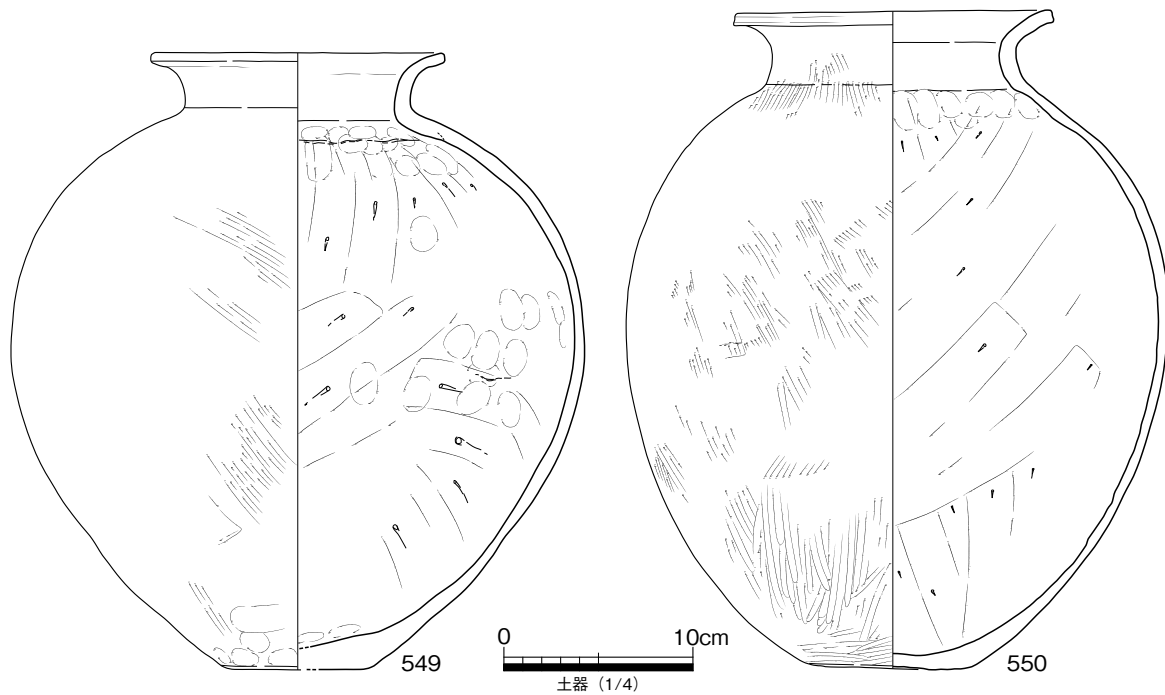
540～544・547・549・550 は広口壺で口縁部は顕著な拡張を行わない。底部は僅かに平底部を残し



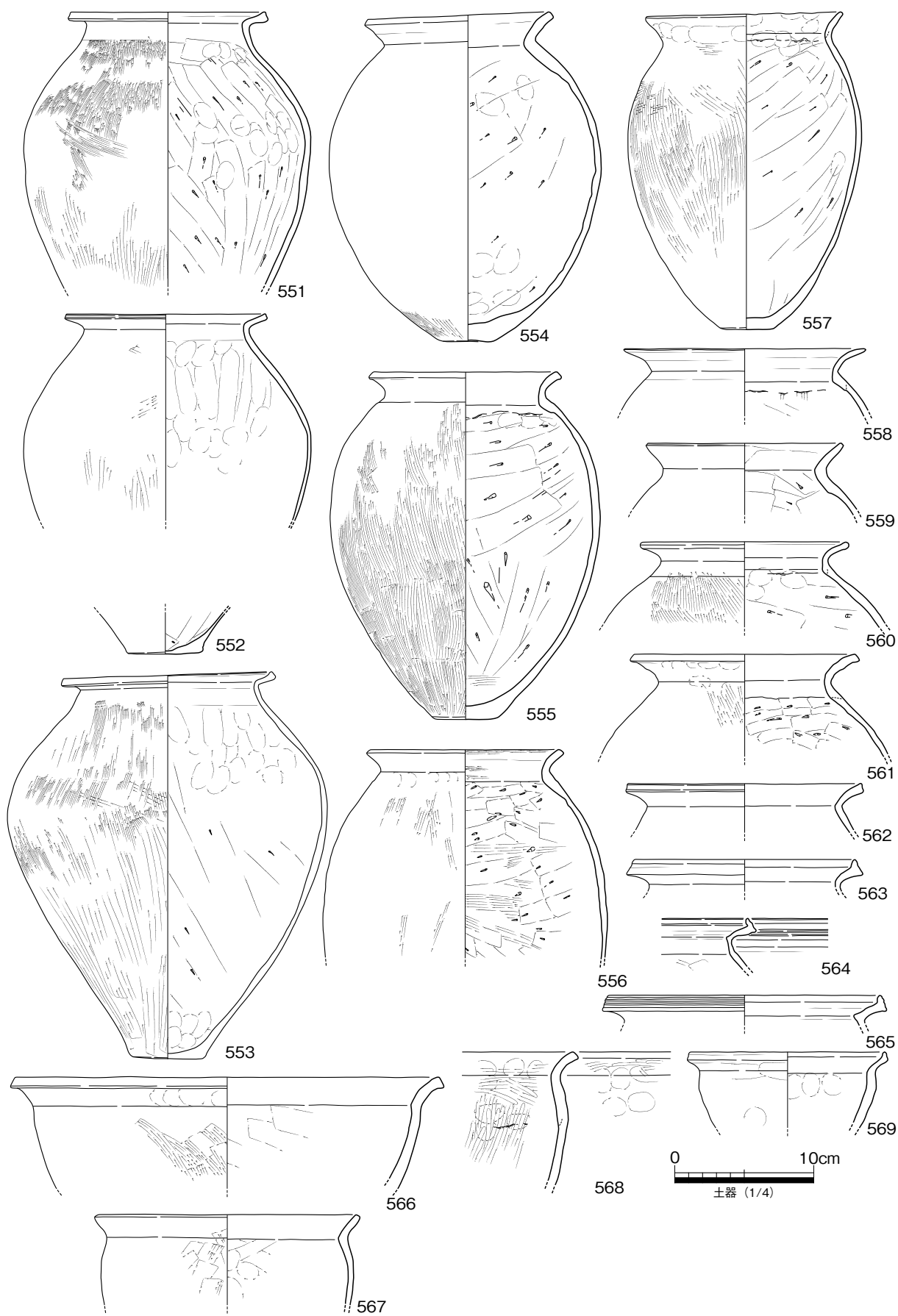
第71図 竪穴建物 SH1169a 平・断面図 出土遺物実測図1



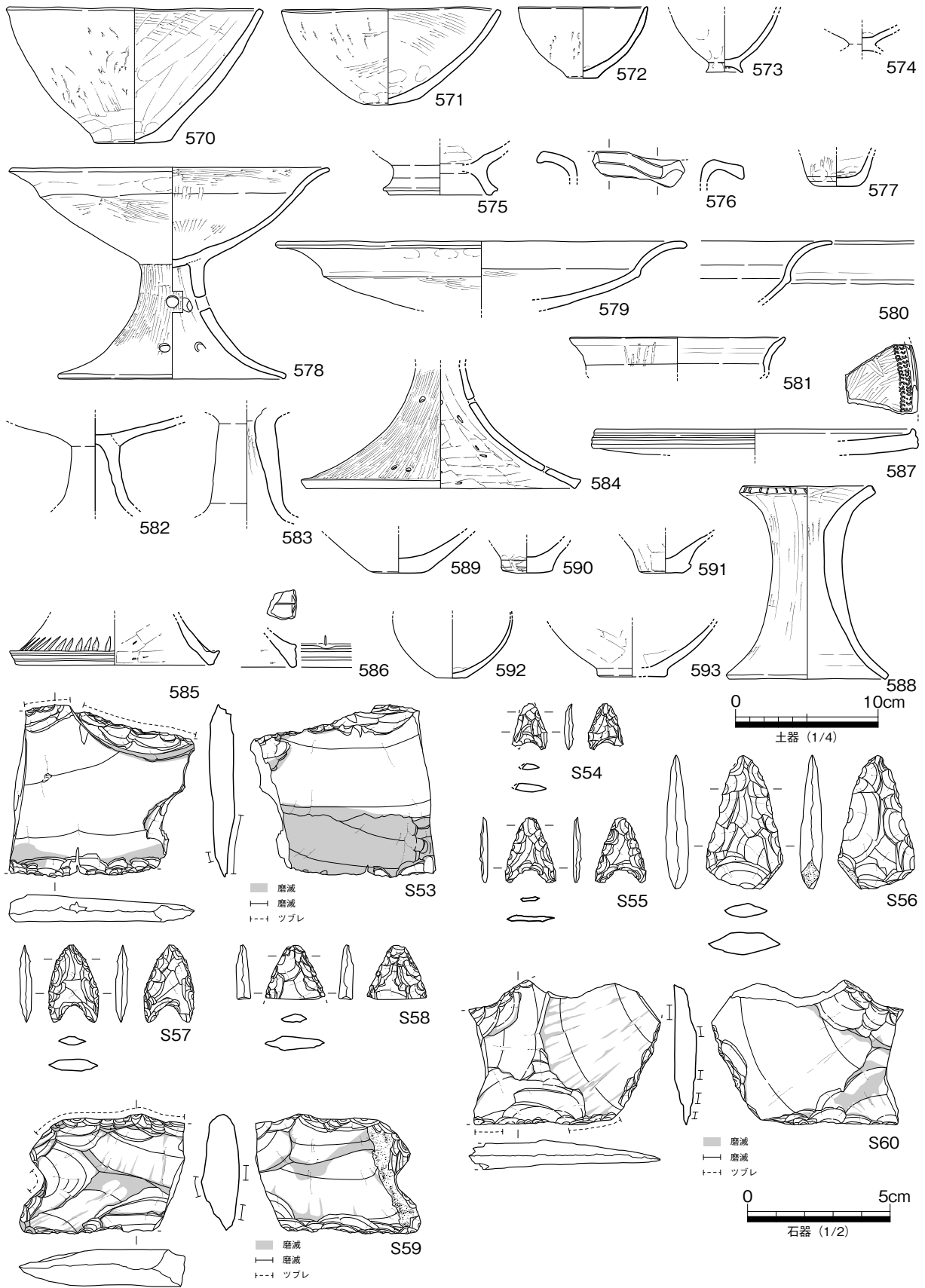
SH1169a 出土遺物状況平面図



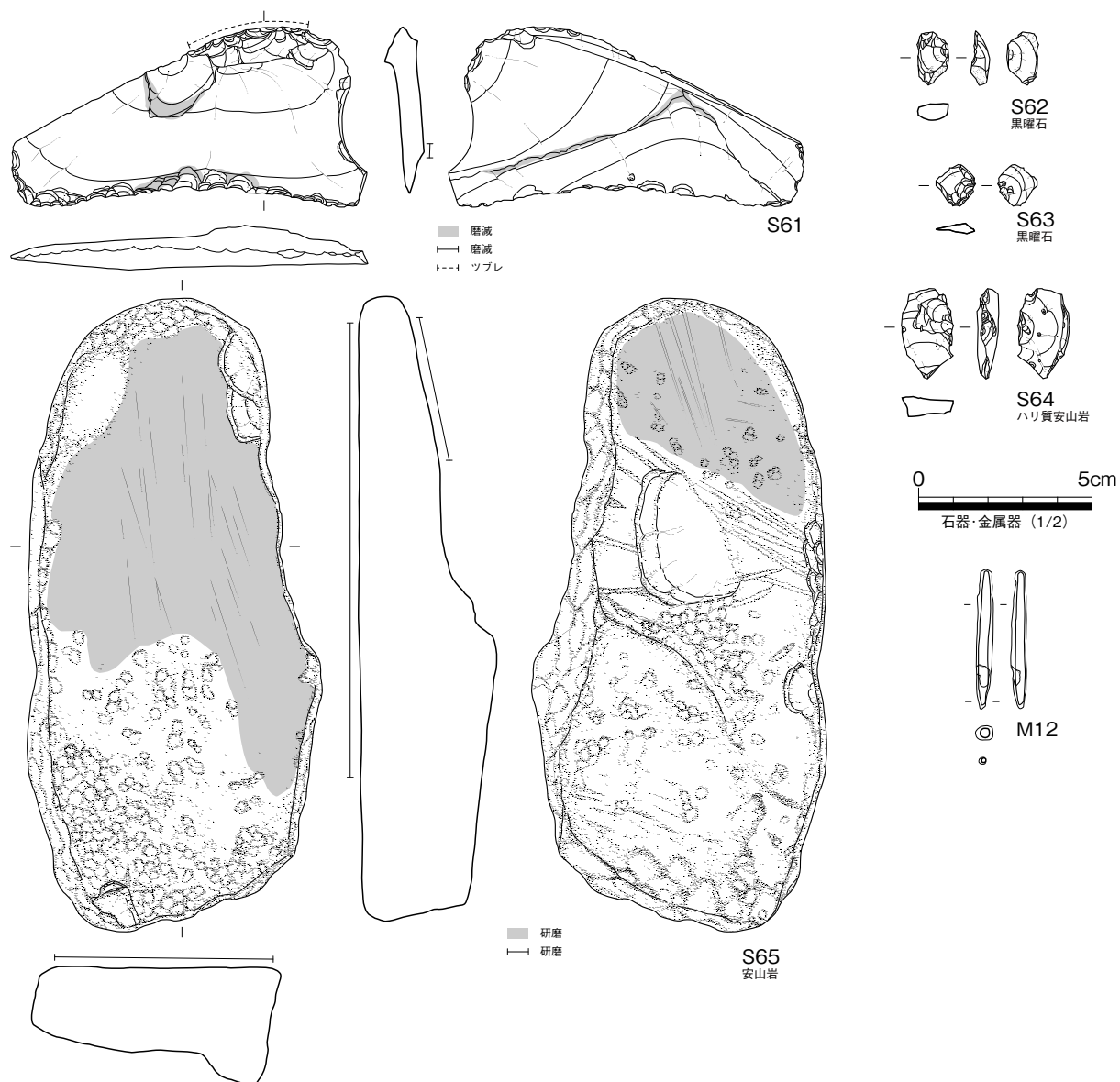
第 72 図 竪穴建物 SH1169a 出土状況図 出土遺物実測図 2



第73図 豎穴建物 SH1169a 出土遺物実測図3



第 74 図 竪穴建物 SH1169a 出土遺物実測図 4



第75図 竪穴建物 SH1169a 出土遺物実測図5

ながら底縁稜線が丸く、丸底化傾向を示し、胴部はちょうど高さの中間点付近に最大径を有す。内面口胴部境は鋭い稜線を形成せず比較的スムーズに丸味で頸部へ移行する。後期後半古段階の特徴である。そのほか545が中期後半古段階、546は後期前半古段階の混在品である。548はA1類の鋸歯文を施文する複合口縁壺である。

551～553は5YR～7.5YR（マンセル値）の褐色系の色調で胎土中に微細な角閃石を含む高松平野香東川下流域の生産が推定されている下川津B類土器（大久保1990ほか）の甕、搬入土器である。肩が張る器形に口縁部が短く外反、底部は胴部下半から直線的に窄まり下方にやや突出しながら安定した薄手の平底に収まる特徴を備えており、後期後半古段階か次段階とみて矛盾はない。554～562は在在地系の甕である。平底をわずかに残し底外縁の稜線が丸みを帯びるのは壺と共通する。内面口胴部境の器形境は緩やかに反転して口縁部に続く器形が多く、終末期の甕のように口縁と胴部との間の明らかな成形時間差を示す鋭い屈曲は認められない。そのほか、563は後期前半、564・565は中期後半の混在品で

ある。557・558 は金雲母が多い胎土 Hb の土器土である。560 は胎土 H の土器である。

566～569 は口縁部が屈曲する鉢である。566・568 は口縁端部を面取りし後期後半までの特徴を有す。567 は内面口胴部境が一旦内彎して口縁部に至る器形は終末期以前の特徴である。569 は後期前半の混在か。

570～572 は直口の鉢である。平底部を残し口縁端部を面取りするものが多い。573～575 は台付鉢である。576 は片口の鉢で口縁部を面取しており、後期後半古段階。

578～586 は高杯である。578～580 は杯部から口縁部が大きく外反する器形で、578 は器形境の稜線や段が緩い。581・584 は褐色系胎土の下川津 B 類土器である。584 の脚部には極めて細い穿孔がある。585・586 は中期後半の混在。

587 は内面半載竹管による刺突文を施す器台である。588 は口縁部に不規則な刻目を施す支脚である。

サヌカイト製打製石庖丁 3 点 (S53・S59・S60)、同スクレイパー 1 点 (S61)、打製石鏃 5 点 (S54～S58)、黒曜石製剥片 2 点 (S62・S63)、ハリ質安山岩製剥片 1 点 (S64)、安山岩製砥石 1 点 (S65) が出土した。これらは床面出土のものではなく、石鏃もいずれも小形の凹基式で本建物に元来伴うものとは考えにくい。黒曜石は石材分析の結果、鳥根県隠岐島の久見原産地産の黒曜石であることが判明した。また、ハリ質安山岩は坂出市と高松市に跨がる五色台山塊の中腹から坂出市城山中腹にかけて広く分布する東奥層の石材を使用したことも判明した (第 4 章第 3 節 2)。これらの打製石器及びその石材は隣接する弥生時代中期後半の竪穴建物 SH1047a または縄文期のものが混在した可能性が高い。S65 の砥石は図の左側の砥面が # 4000、右側の砥面が # 800 である。

M12 は断面円形で小形の棒状の製品で下端が鋭く尖ることから鉄錐とした。下端部径は約 1mm である。

出土遺物はその多くが上層土器溜りの遺物で一定の時間幅をもつ土器群である。とはいえ残存状態が良好なものが多く、小形鉢の出現や高松平野産の下川津 B 類土器の出現等、後期後半古段階の一括資料として見て差し支えないことから、本建物は後期後半古段階に廃絶した建物と判断した。

(24) SH1207a・SH1208a

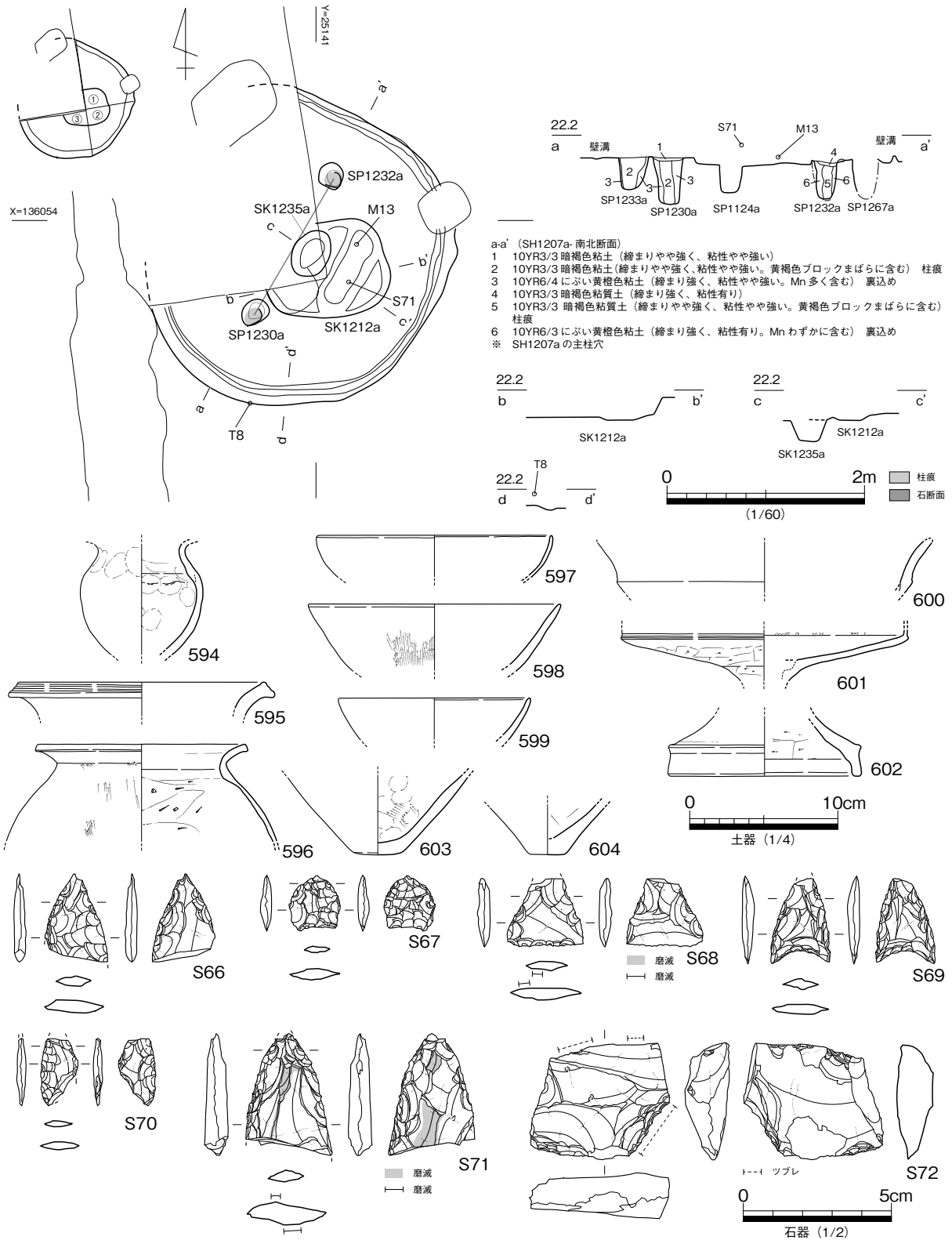
SH1207a は 1 区西側で検出した円形の竪穴建物である。直径 3 m の中央掘方内の壁際に壁溝が巡り、主柱穴 2 基 (SP1232a・SP1230a) がある。その間やや東よりに中央土坑 2 基 (SK1212a・SK1235a) が重複して存在する。その外周に直径約 6 m に配された想定 10 基の外周柱穴があり、うち 7 基 (SP1190a・SP1184a・SP1303a・SP1265a・SP1281a・SP1224a・SP1239a) が残存する。またその外側に周溝 (SD1038a・SD1175a) が巡り、研修棟調査区 SD04 がこれに接続する。これを SH1207a と区分して SH1208a とする。外の遺構との切り合い関係は東側の外周溝 SD1038a が SH1035a を切り、SH1047a とはきわめて近いが微妙に重複を避けている。

中央土坑とした SK1212a からは水洗抽出した 15.51g の炭化物中にコナラ属クヌギ節、サカキ、マツ属複雑管束亜属、コナラ属コナラ節、コナラ属アカガシ亜属の燃料材が同定された。そのほか、本土坑埋土からは微細な動物遺存体が比較的多く出土しており、鑑定結果を第 4 章第 7 節 2 に掲載した。

なお、SH1208a の柱穴列に属する柱穴 SP1224a は c ライン断面 1 層の中位の高さに根石が残る。その根石の下位には同じ位置で先行して建てられた掘立柱建物 SB1347a の構成柱穴 SP1187a の掘方が及んでいる。その掘方下位まで含めて SP1224a として図化した。正確にはその根石までが本竪穴建物

に所属する柱穴の掘方である。

両建物を区分した理由は出土土器に一型式を超える時期差が認められることによる。平面配列から同一遺構の可能性が高いものの、それを偶然の一致と見ることも不可能ではないことから、念のため別遺構として報告する。以下、遺構各部位を詳説する。



第76図 竪穴建物 SH1207a 平・断面図 出土遺物実測図1

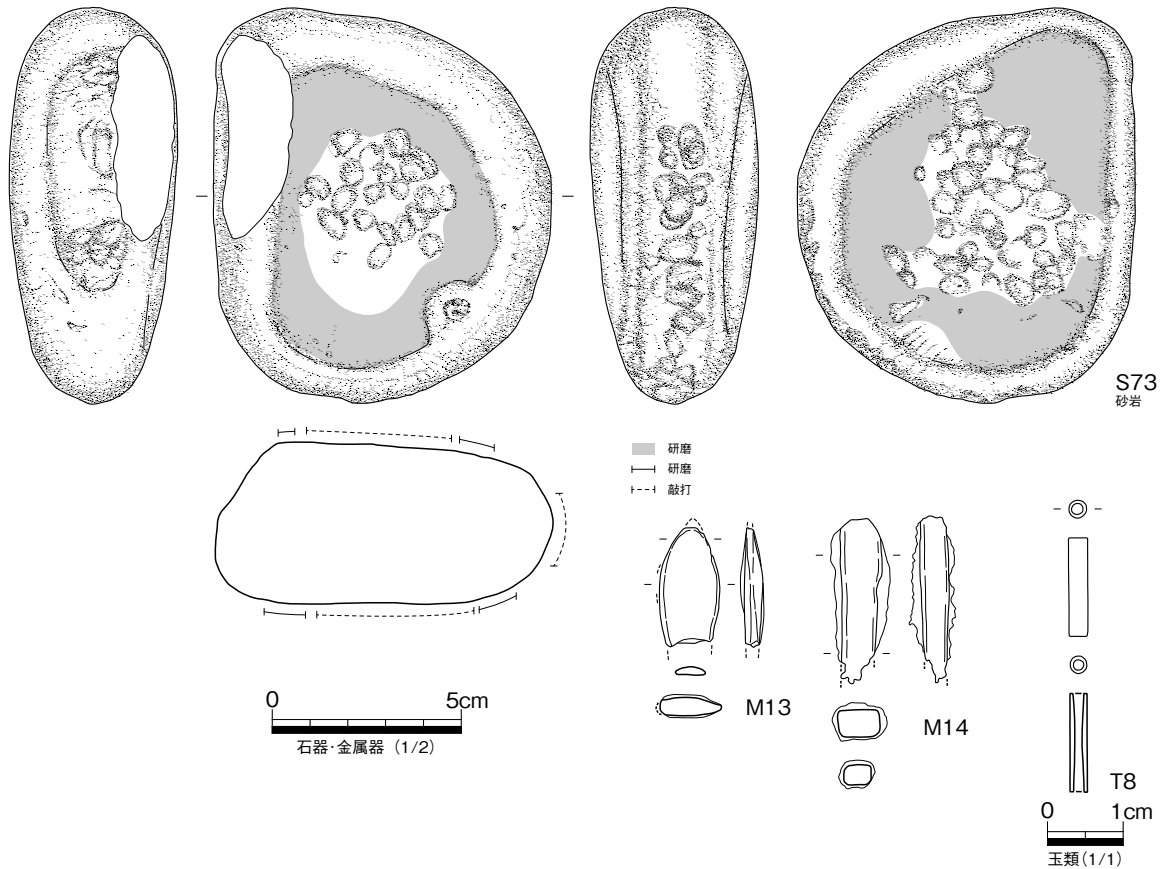
<出土遺物>

SH1207a 出土土器は床面に残る遺物はなかった。中央土坑とした SK1212a はその下部の SK1235a を切っており、SH1207a 自体を切る別遺構の可能性もある。SK1212a 出土の土器は 594・597・598・603・601・602 である。また 596 は支柱穴とした SP1230a で出土した。なお、604 は貼床層出土、594 は貼床層出土破片と SK1212a 出土破片の接合であり、両土器が本建物の埋没時期の上限とみなしうる。604 は底部が矮小化した鉢底部で、体部が直線的に斜め上方に開く形態から後期後半古段階である。一方で SD1038a 出土の土器は中期後半新段階の土器が多いものの、608・610・613・614 が後期前半古段階まで下る可能性がある。したがって後期前半古段階を廃絶の下限とみなしうる。このように出土遺物から考えると、両建物は前後する別時期のものと考えざるを得ない。なお、610 は胎土中に結晶片岩を含む阿波地域からの搬入品である。

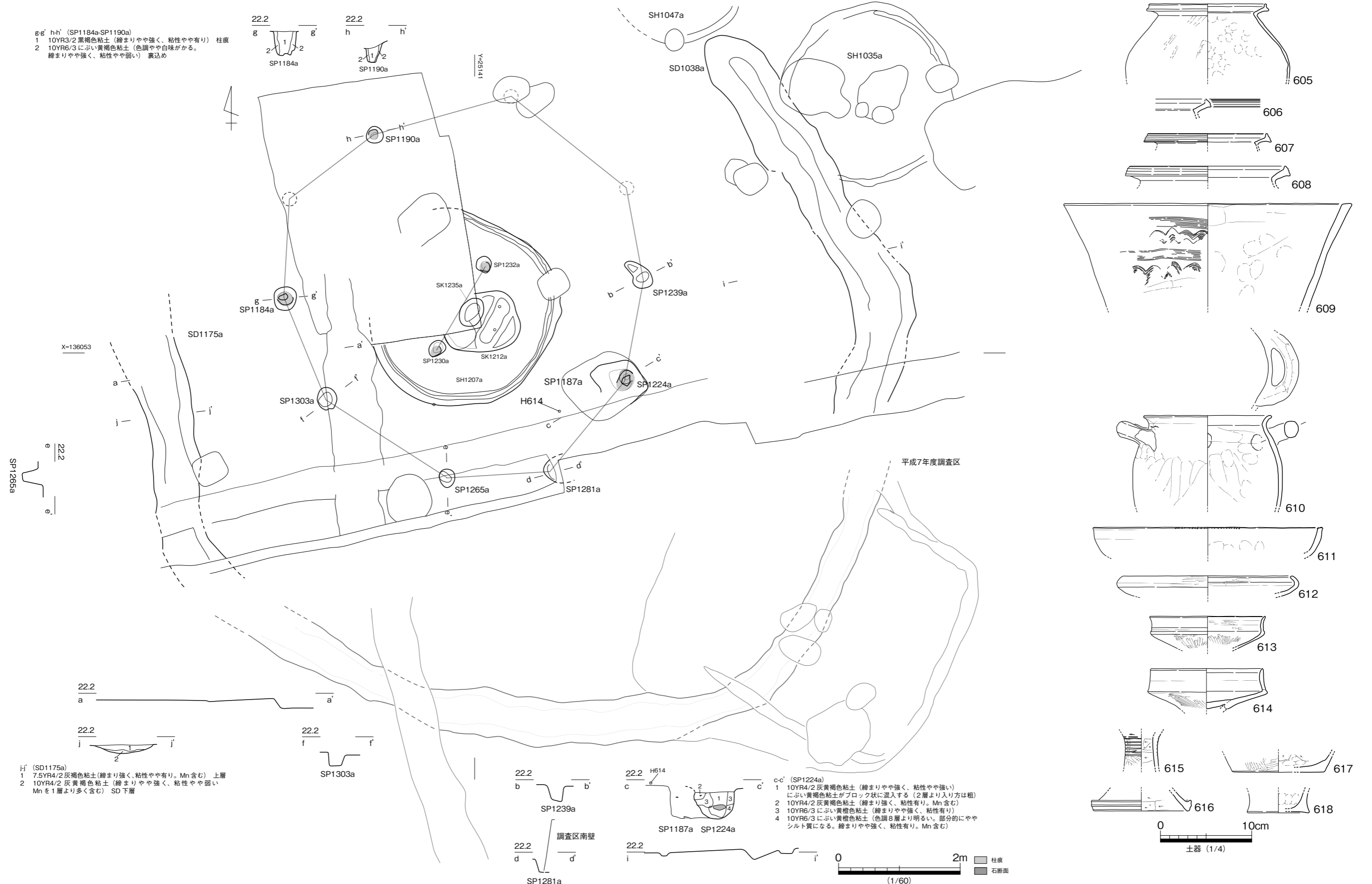
S66～S70 はサヌカイト製打製石鏃である。S67 は凹基 B 式で寸詰まりの形状である。S71 は石庖丁を転用したサヌカイト製打製石剣。S72 は楔状石核である。S73 は砂岩製の磨石で敲打と弱い研磨（表裏とも # 1200）が認められる。

M13 はヤリガンナ刃部片、M14 はやや肉厚で断面方形の棒状鉄片である。M14 の上端破断面は錆化し摩耗する。

T8 は碧玉製管玉である。上下からの両側穿孔である。回転軸が上下で一致するため上下の食い違いが見られない。孔内レプリカの SEM 観察では回転研磨痕が不明瞭であり、鉄錐による穿孔と推察された（第 4 章第 4 節第 3 項）。また蛍光 X 線分析法及び ESR 分析法による科学分析を行った結果、石川県小松市の菩提-1 との原産地判定を得た。菩提産地は小松市街地から南に約 10km の山間地にある緑



第 77 図 竪穴建物 SH1207a 出土遺物実測図 2



第 78 図 竪穴建物 SH1208a 平・断面図 出土遺物実測図

色凝灰岩露頭を指す。広く女代南B遺物群に帰属するもので、八日市地方遺跡出土の玉造遺物と関係が深いと推定された（第4章第4節第5項）。

SH1207aは出土遺物から後期後半古段階に機能し廃絶したものとする。一方、SH1208aは周溝出土遺物から後期前半古段階に機能し廃絶したものとする。

周溝と柱穴列を伴う平地式建物は、竪穴部を伴うSH1035aのように中期後半新段階に本遺跡で一般的だが、本SH1208a例から後期前半古段階まで継続することがわかる。なお、遺構配置から同様に竪穴部を伴う平地式建物と推定されるSH1047aの竪穴部と微妙に切り合いが避けられている状況に鑑み、それに後続する遺構と考えておきたい。

SH1207aは後期後半古段階より積極的に新しく位置づけできる遺物がないことから、その時期に機能し廃絶した建物と位置づける。伴出した碧玉製管玉は鉄針を使用して穿孔する技法C（大賀2001）による北陸西部系管玉（大賀2006）である。後期前半古段階に相当する旧練兵場Ⅲ（研修棟）SB04出土の碧玉製管玉は石針を使用して穿孔したことが判明しており、後期後半古段階の本例から鉄針穿孔の管玉が流入し始めた可能性がある。

（25）SH2010a

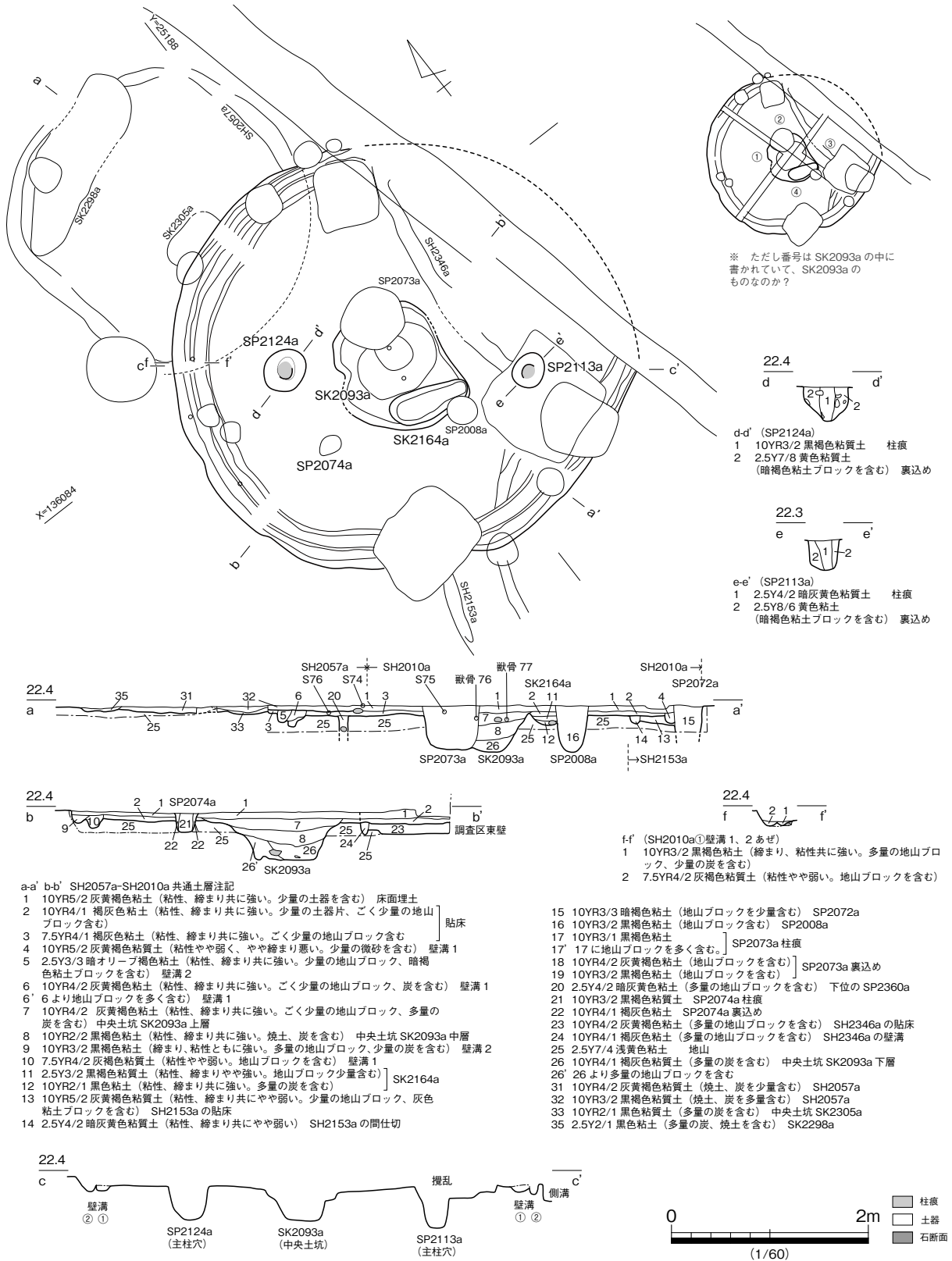
2区東端中央付近で検出した直径4.6m円形竪穴建物である。推定面積は16.6㎡である。SH2153aを切り込み、北側をSH2057aに、東側をSH2346aに、西側をSH2149a切られる。ただしSH2149aは掘方が浅く、本竪穴床面には到達しない。北西側の床面で多数の土器が出土した。壁溝が二重に巡り1回の建て替えを示す。支柱穴は2個（SP2124a・SP2113a）、その間に深い灰穴炉のSK2093aと浅く細長い灰溜土坑SK2164aがある。いわゆる「一〇土坑」の形式をとる。両遺構の埋土を水洗抽出した3gの炭化物中にはケヤキの燃料材が同定され、SK2093aではモモ核6点が出土した（第4章第2節4）。

そのほか、本竪穴建物からは微細な動物遺存体が比較的多く出土しており、鑑定結果を第4章第7節2に掲載した。

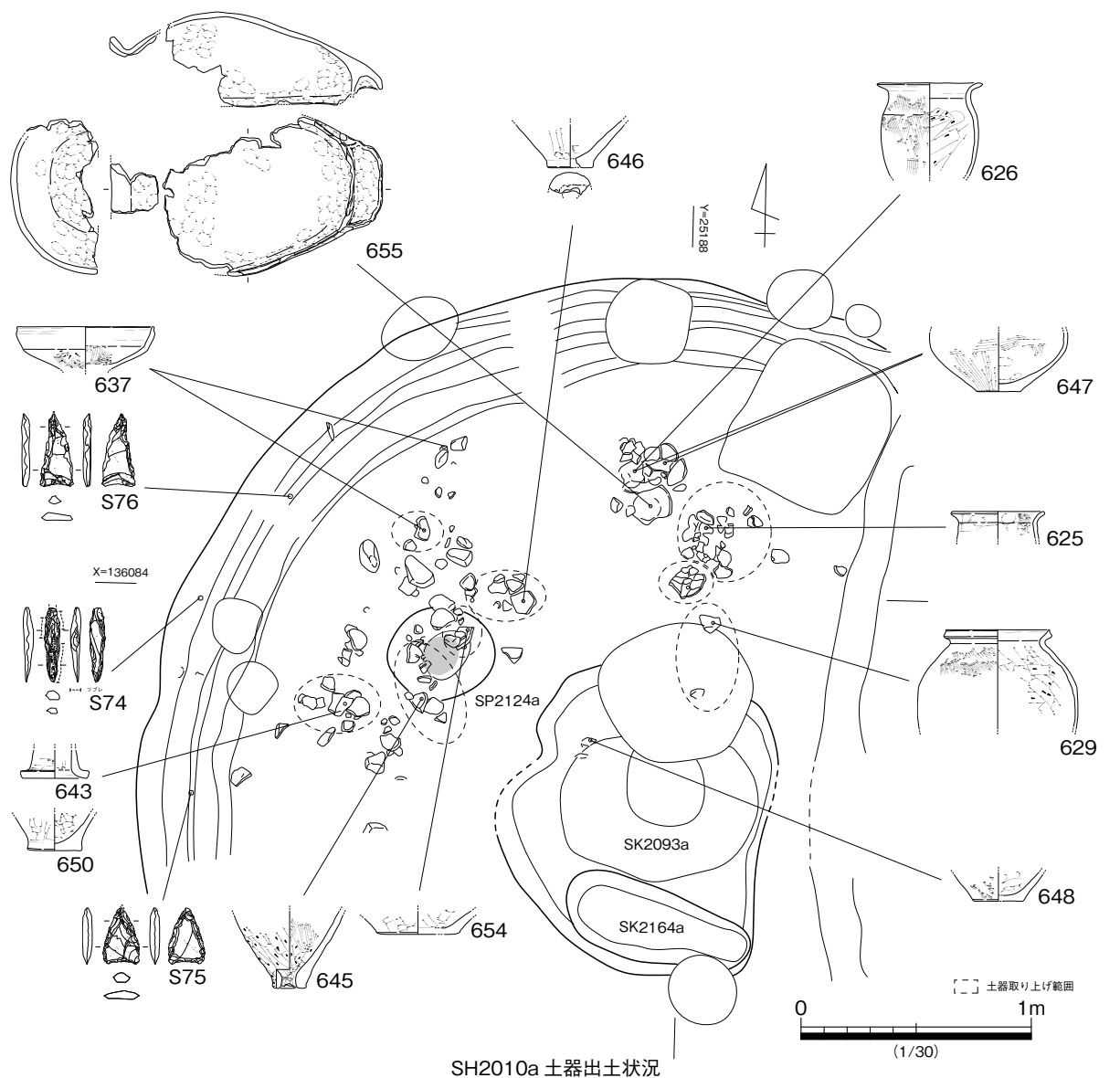
＜出土遺物＞

619・621は後期前半に属す短頸の広口壺である。620は口縁部が大きく開き拡張した端部に凹線文を施す広口壺。床面から遊離して出土した土器で終末期の混在品。甕は622・623・625～628の内面口胴境の稜線が緩い特徴から後期前半に位置づけられる。なお、623の口縁下端は小さく突出する備後地域に多い属性である。629は後期前半中段階を上限とする形態。そのほか、631・632は厚手の直口鉢で後期前半から出現する形態である。高杯や底部形状は後期前半に位置づけられる。638は胎土中に結晶片岩を含む阿波地域からの搬入土器である。専用甌は形式として本遺跡において土器様式に組込まれるのは後期後半以後だが、645の甌は外面の粗いヘラ削りや底部焼成前穿孔の形状が出現直後の専用甌と比べ異質である。後期前半における搬入品の可能性がある。また、634の高杯は香東川下流域産の特徴的な胎土を有し内面に赤色顔料（朱）が付着する。655は把手付広片口皿である。口縁部から底部（把手部）までの残存状態が良好である。内外面共に細かく検鏡したが赤色顔料の付着は認められなかった。把手部の形状は、本遺跡の旧練兵場Ⅱ報告のSH31で出土した後期前半古段階の出土品より簡素化して薄壁となり、把手立上り部の平面形が緩やかなカーブをもつ。旧練Ⅲ報告のU区SH5011出土の後期前半中段階の同類品に型的に後出する。

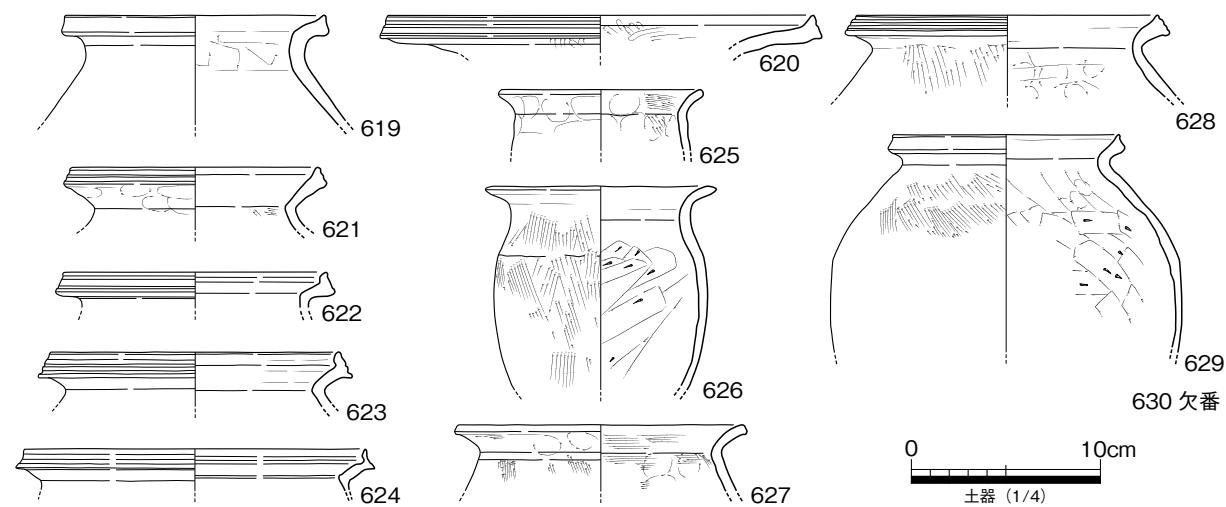
サヌカイト製打製石器は石錐1点、石鏃2点が出土した。S74は細かく下端部を調整し細身化を図る



第 79 図 竪穴建物 SH2010a 平・断面図



SH2010a 土器出土状況

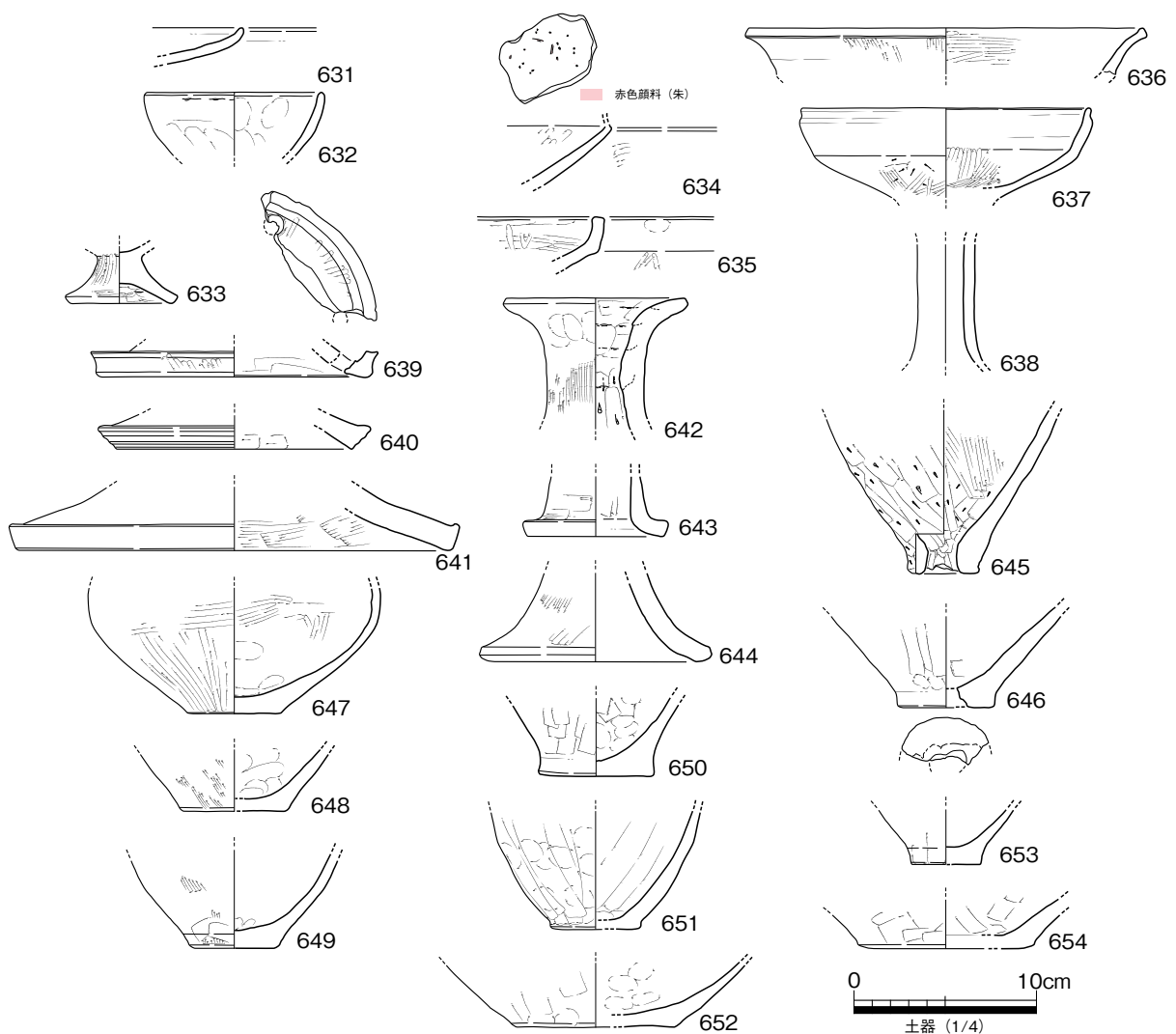


第80図 竪穴建物 SH2010a 出土状況図 出土遺物実測図 1

錐である。最下端に回転による擦痕は観察できない。実体顕微鏡で観察すると僅かに折損痕があることから、さらに細い最下端が存在し、極めて細い穿孔を目的としたものと推察する。

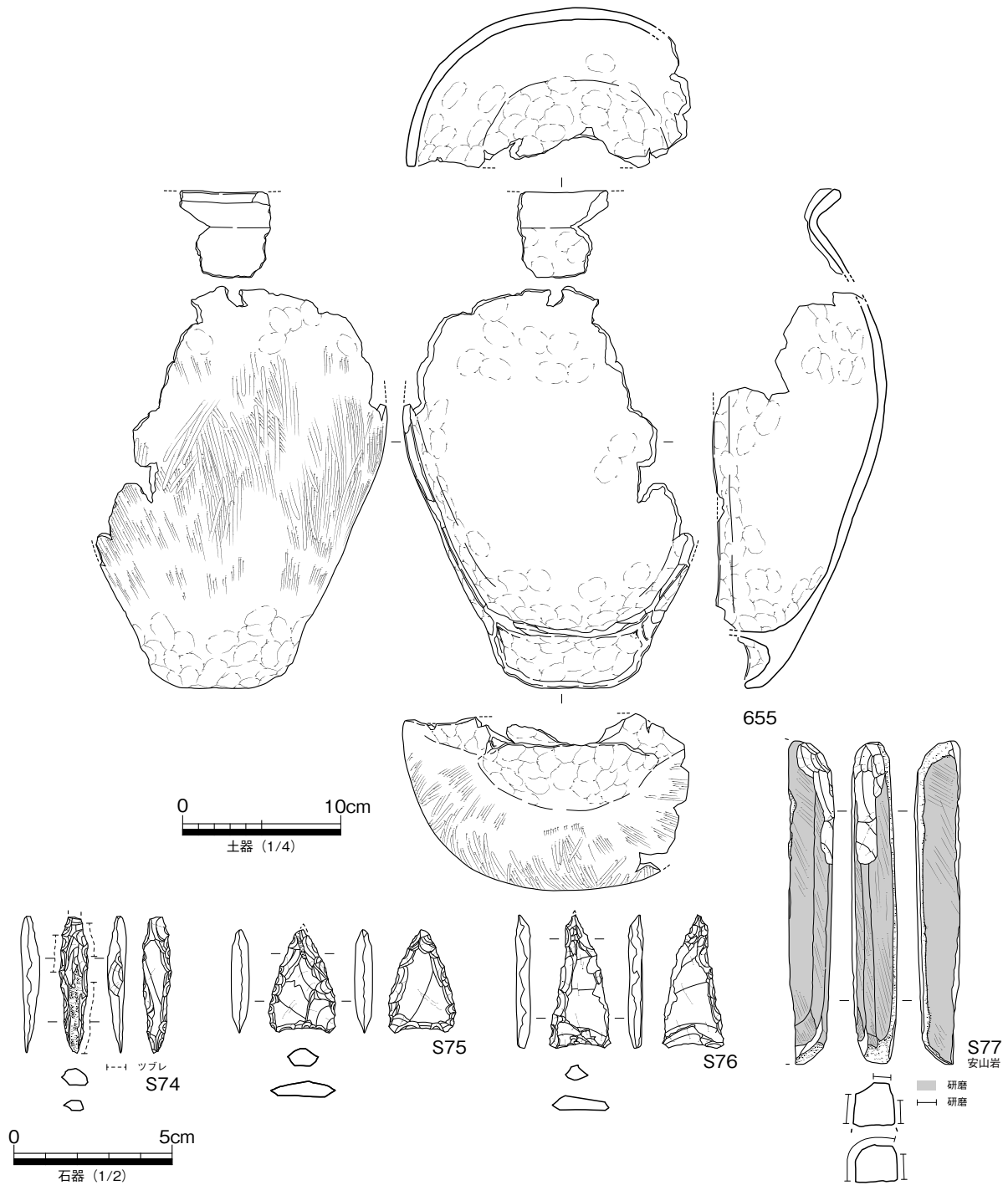
S77 は黒色の安山岩製砥石である。縦方向に割れており、表裏及び一側縁に研磨痕を認める。側面はさらに細い三面の研磨面に分かれる。いずれの研磨面も平滑度は高く # 4000 ~ 8000 に相当する。また研磨面には微細な傷溝が多数認められる。図の左側 (a 面) を表面粗さ測定機で計測した結果を第 4 章第 3 節 4 の計測データ 2 に掲載した。Ra 値 (算術平均粗さ) $1.6 \mu\text{m}$ 、Rz 値 (最大高さ) $12.8 \mu\text{m}$ であった。グラフを見ると、同時に計測した外の 2 点と比べ、グラフの上下の振れが少ない。研磨シートと実際の粒径の関係は # 4000 が $3 \mu\text{m}$ 、# 8000 が $1 \mu\text{m}$ である。したがって研磨シートで示した # 4000 ~ 8000 の評価と、機械測定した粗さ測定値は整合し、砥石としては非常に平滑度の高い状況が示された。小形定形の仕上げ砥石に分類できる。

出土土器に若干の時期幅が認められたが、床面で捉えた土器群は後期前半新段階を下限とし、本建物の廃絶時期を示す。床面出土の把手付広片口皿は一部欠損するが全形を窺える貴重な資料である。同器種で赤色顔料が付着しない事例としては、高松市上天神遺跡に数例あり、同市岡清水遺跡にも 2 例が指摘されているが、岡清水遺跡例は形状からみて同器種かどうか確定的ではなく、他の出土土器に朱付着



第 81 図 竪穴建物 SH2010a 出土遺物実測図 2

土器が認められないことから、類例としては現時点では上天神遺跡のみである。上天神遺跡では砒素のみの反応を持つものも知られている。今回の資料が、表面劣化により朱が残存しないのか、砒素のみの有意な行為につかわれたのか、そもそも顔料関連の作業に使用していないのか、いずれかの判断は現時点では不明である。ただ、後述のSH2153a出土の辰砂鉱石片の出土や、SH2087a内の攪乱出土の石杵、そのほかの朱附着土器も近距離に集中して出土しており、複数時期にわたって朱精製等の行為が行われたことと関連する遺物であることは間違いない。



第 82 図 豎穴建物 SH2010 出土遺物実測図 3

(26) SH2038a

2 区東壁沿いの南端付近で検出した突出部付きの直径 7m の円形竪穴建物である。推定床面積は〇〇である。約半分は調査区東側に外れる。主柱穴は残存範囲に 3 基 (SP2288a、SP2290a、SP1071c) あり、ベッド状遺構が巡る。下段部は当初 SH2100a や SH1061c として調査を進めたが、最終的には統合して報告した。焼土が床面 2 か所に分布していた。

記録からの分析過程を記述すると、主柱穴 SP2288a の東側付近では本建物の東へ延びる掘方の方向と、当初 SH2100a としていた段の方向がほぼ同じで、主柱穴から東にベッド状遺構の段が伸びると考えられた。主柱穴 2290a への段も張出前面の壁溝に沿って伸びており、ベッド状遺構の段とみて問題ないと考えられた。そうすると、主柱穴 2290a から屈曲して東に折れるように検出している攪乱下部の遺構痕跡は部分的な検出にとどまっており、本来は SP1071c へ向かって直線的に続いていた可能性が高いものと思われた。以上を踏まえて遺構を統合した。なお、断面記録では、突出部やベッド状遺構はすべて貼床土で構成することがわかる。

<出土遺物>

壺は長頸壺を組成し、広口壺は頸部が直線的に立ち上がる形状である。658 は胎土 H の土器である。甕は内面口胴境の稜線が緩慢なものが多く、後期後半古段階の様相である。662 は胎土中に結晶片岩を含む阿波産の土器である。また 665 は下川津 B 類の土器形態を在胎土で製作した模倣甕。鉢は 671 が直線的な体部から口縁部が屈曲して短く水平に折れ曲がり、後期後半古段階の特徴をもつ。また 669 等の小形器種がみられ、平底を残すことから後期後半古段階に属すと考えられる。高杯は口縁部が屈曲して外反するもので、673 は胎土 H、675 は備中産の丹塗、677 は高松平野産の下川津 B 類土器である。底部は 685 で丸底化するが、胴部から突出する器形は古い属性である。このように出土土器は後期後半古段階を下限とするものといえる。

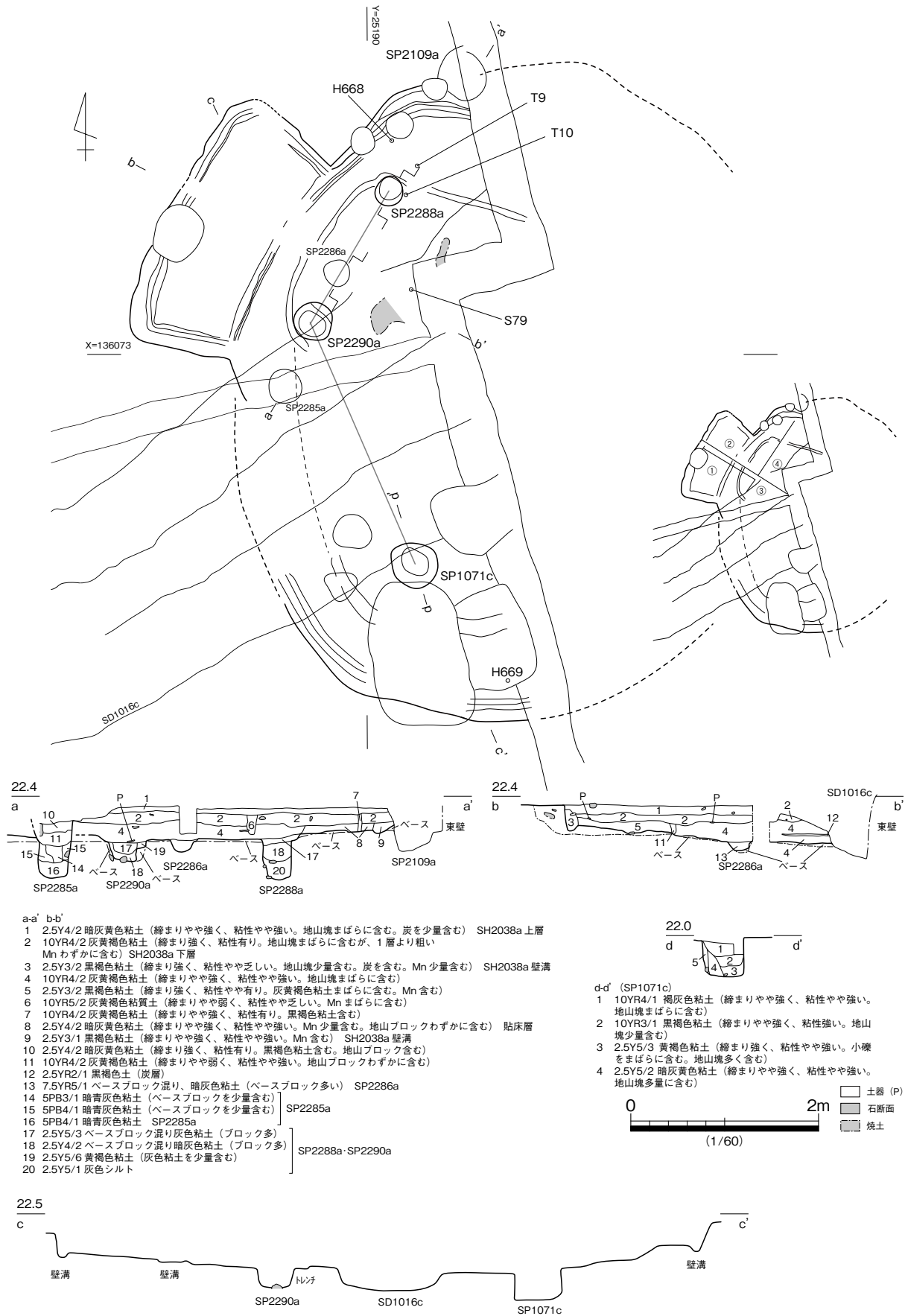
687 は土器片周縁を加工した土製円盤。T11 は土玉の半載品である。

石器はサヌカイト製石鏃 2 点 (平基式・凹基式)、鉄器は小鉄片が 1 点出土している。T 9・T10 はガラス製小玉である。いずれも青緑色系の銅・錫・鉛を含むカリガラスである。

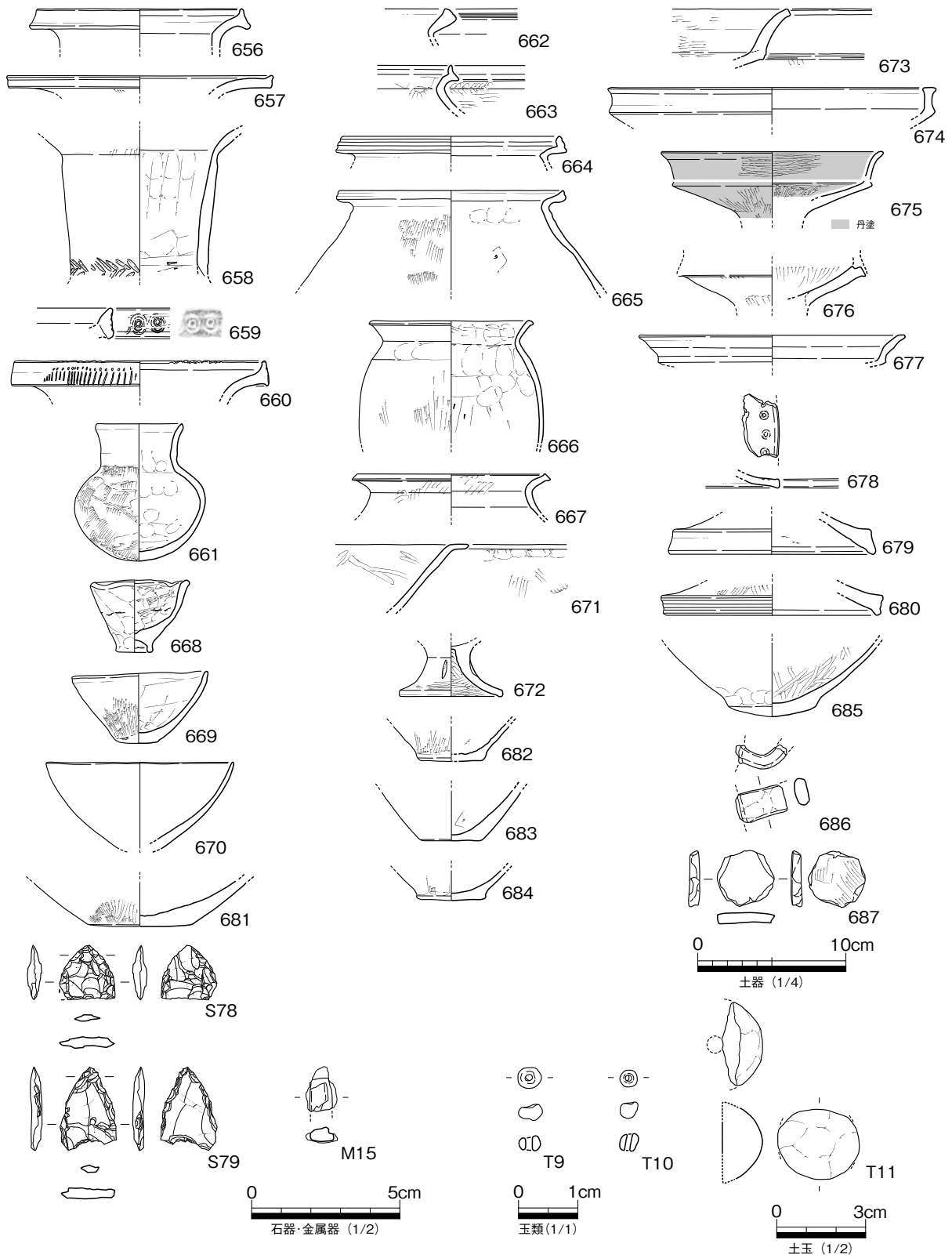
出土土器からみて、後期後半古段階を下限として機能・廃絶した竪穴建物である。突出部付き建物は本遺跡では普遍的にみられ、後期前半から後期後半新段階にかけてその数が多い。系譜としては宮崎県域を主体とした花卉形住居分布域に端を発し、豊後、豊前地域を介して西部瀬戸内に伝播し、その属性が当地域に伝わったものである。このような突出部の属性は高松平野以東では稀少で、主に丸亀平野以西に分布する。

(27) SH2053b

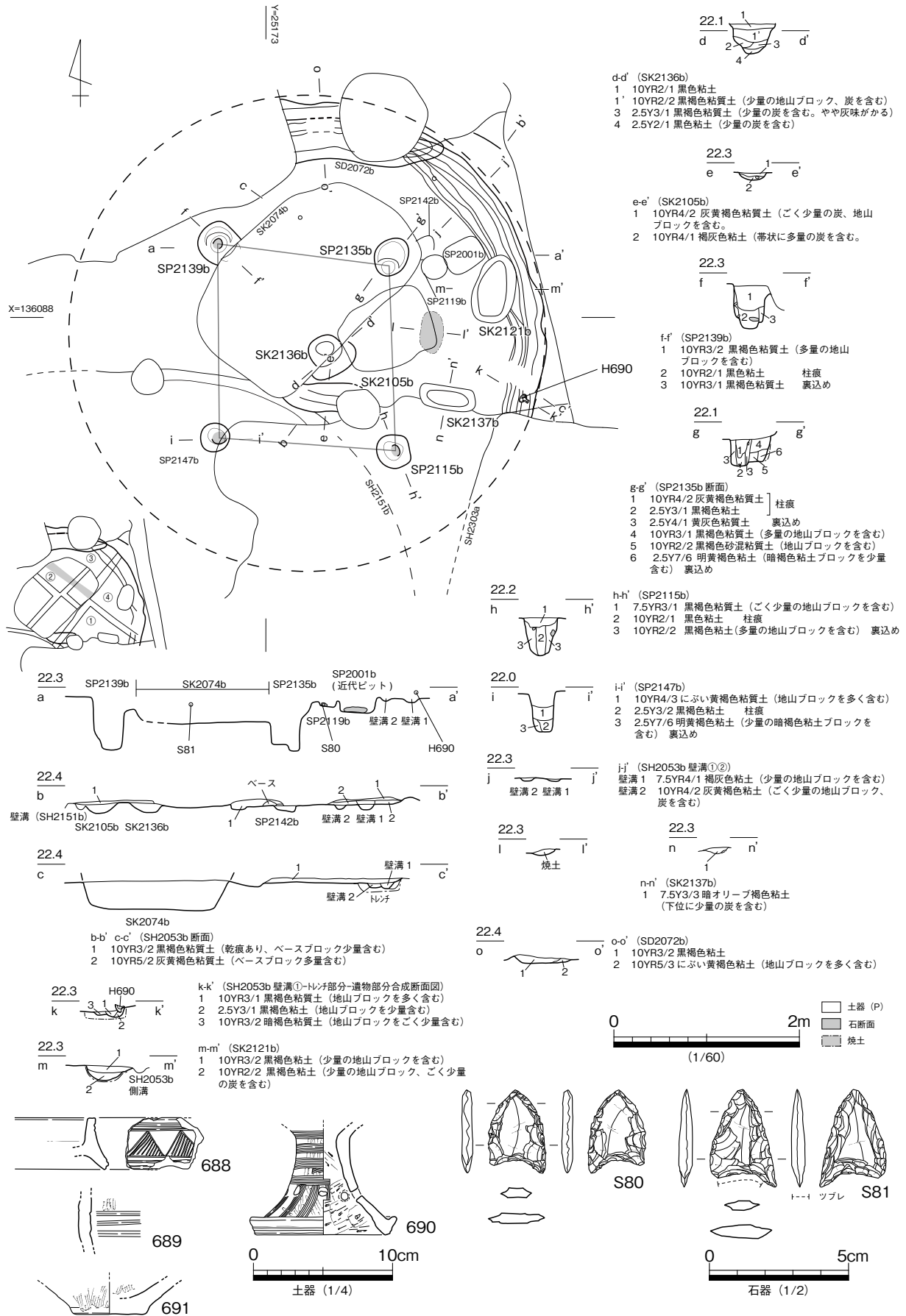
2 区北端の中央付近で検出した直径 5m の円形竪穴建物である。推定面積 19.6㎡である。中央部を長方形土坑 SK2074b に切られ、南西部を SH2078b に、南東部を SH2303b 切られる。壁溝が 2 重に巡ることから床面の貼替えを実施したことがわかる。主柱穴は 4 基 (SP2139b・SP2135b・SP2115b・SP2147b) である。柱間は 1.9～2.1 m。中央土坑 SK2136b は小形だが比較的深い灰穴炉で、直径 0.5 m、深さ 0.3 m を測る。細長い灰溜土坑 SK2105b が付属する。いわゆる一〇土坑の形式である。土坑から東にやや離れた床面の一部には焼土面が残る。断面図や記録写真では、貼床は積極的には見出せない。



第 83 図 竪穴建物 SH2038a 平・断面図



第 84 図 豎穴建物 SH2038a 出土遺物実測図



第85図 竪穴建物 SH2053b 平・断面図 出土遺物実測図

<出土遺物>

土器少量と石鏃 2 点が出土した。688 は胎土 H の器台口縁部片である。細線による A2 類の鋸歯文を施しその上限を圏線で締める。旧練Ⅱ報告の SR02 上層 4531 が良好な類例である。複合口縁壺の可能性もあるが、いずれにしても鋸歯文と圏線で装飾するのは後期後半古段階の属性である。打製石鏃 S80・S81 はサヌカイト製でいずれも凹基式である。

出土遺物より後期後半古段階に機能し廃絶した竪穴建物と判断した。2 区北西の建物集中分布域では、SH2078b に後続する建物で、この分布域においては唯一連続する時期の建物で掘方に切り合いが認められる例である。

(28) SH2057a

2 区東側中央付近で検出した円形の建物である。南に重複する SH2010a と、それに後続する SH2149a 両建物を切り込んで構築される。竪穴部は小規模で直径 3 m、周縁に溝が巡るが支柱穴は竪穴部には認められない。外縁柱穴列 7 基以上 (SP2361a・SP2145a・SP2053a・SP2044a・SP2022a・SP2013a・SP2009a) と組みあって直径 6 m 以上の平地式建物となる。推定面積は 28.3㎡である。床面中央には浅い炭溜土坑 2 基 (SK2304a・SK2305a) があり、床面北側には廃絶時に浅く掘り込まれた土坑 SK2298a がある。いずれの土坑からも多数の炭化物が出土した。床面直上の土壌を含めて水洗し、4.91g の炭化物を抽出した。中央土坑 2 基検出の炭化物は同定できていないが、床面及び土坑 SK2298a の炭化物ではヤマグワ、サクラ属、ムクノキの材が同定された。廃絶時に焼却された材と考えられる。

<出土遺物>

土器片少量と石鏃 1 点が出土した。692 は頸部が内傾する広口壺である。頸部上端で器形が屈曲し口縁部が短めに開く。後期後半新段階から出現する形式である。693 は口縁部が緩やかに反転して外反する甕である。694 は口縁部がわずかに屈曲して短く外に開き、端部を面取りする鉢である。これらは後期後半新段階に位置づけられる。

S82 は凹基 B 式のサヌカイト製打製石鏃である。基部のノッチは極めて浅く最大幅部位が鏃身中位にあるのが特徴で、中期後半の混在品か。

出土遺物から後期後半新段階に機能し廃絶した建物と判断した。2 区東側の建物集中分布域においては南に離れた SH2075a に後続して構築された建物である。床面に炭化物が多数残されていた。これは廃絶時あたって建築材等の焼却・竪穴の埋め戻しを行った可能性を示すものだが、この建物に後続する建物は直近には所在しない。

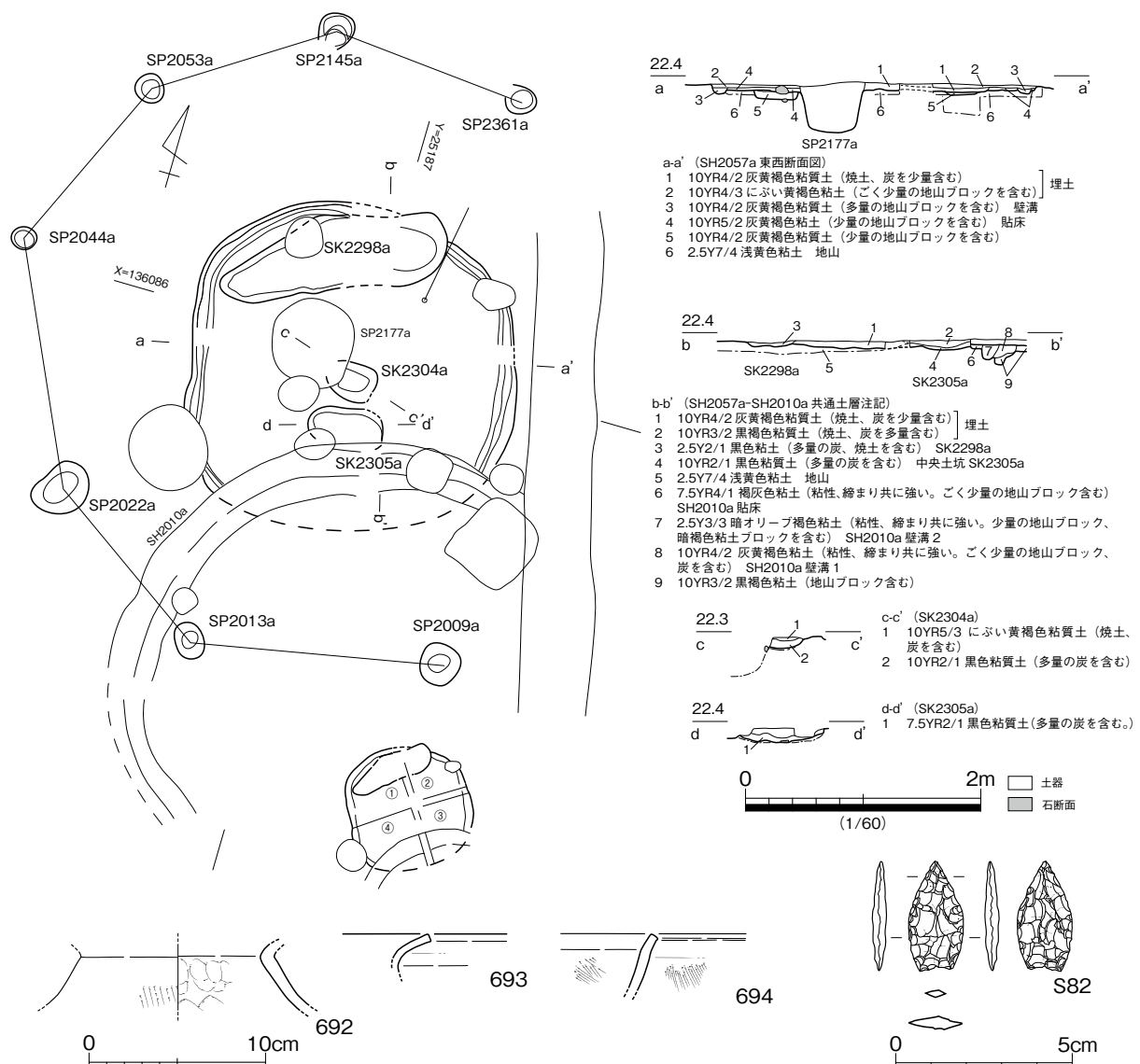
(29) SH2075a

2 区東端の中央やや南で検出した直径 5.0m の円形竪穴建物である。推定床面積は 19.6㎡である。後期前半古段階の SH2153a と大部分で重複しそれを切る。また西南隅で終末期古段階の SH2087a に、北東隅で後期後半新段階の SH2346a に切られる。なお南接する後期後半新段階の SH2038a の突出部とは数 cm の間隔を空けて微妙に切り合わない。さらに後期前半新段階の SH2010a とも 0.3 m の間隔を空けて微妙に切り合わない。

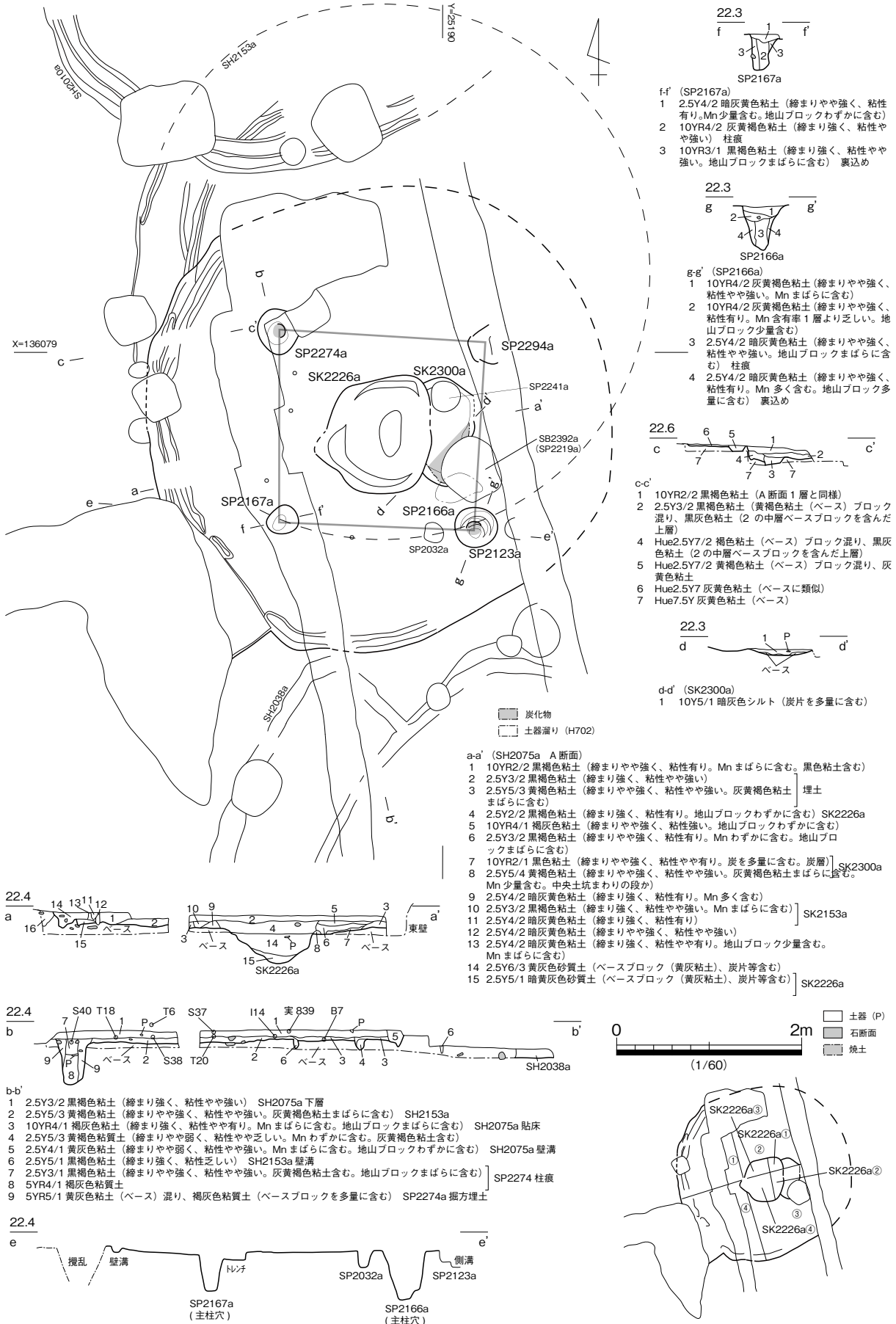
支柱穴は 4 基 (SP2274a・SP2167a・SP2166a・SP2294a) を柱間 2.1 m でほぼ正方形に配置する。その中央に深さ 0.3 m の灰穴炉 SK2226a、その東側に浅い炭溜土坑 SK2300a を配置する。両土坑は切り

合いがあるように記録されているが、写真を詳細に解析すると a ライン7層としたSK2300aの濃密な炭化物層は、SK2226aの掘削によって途切れた状況は認められず、SK2226a 東側の数センチ地山を削り残した「土堤状の高まり」にスムーズに収束する。「土堤状の高まり」は竪穴建物の中央土坑の周縁に良く認められるもので、灰の飛散を止める機能が考えられる。炭溜の炭との混在を避ける目的で設けたものと推察可能である。ここでは堆積土の切り合いが明確には認められないことから、両土坑は同時併存したものと解する。要するに外の遺構でも認められる一〇型土坑の様式に相当する。床面及びSK2300aの土壌を水洗し抽出した0.98gの炭化物にはシイ属、サカキといった燃料材が同定された(第4章第2節4)。また南北方向トレンチでモモ核2点が出土している。トレンチ出土なので、下位のSH2153aに属するものかもしれない。

断面記録ではSH2075aの床面直下に貼床層とした堆積層がある。基盤土ブロックを多く含む土層で、その平面的な分布を検証した結果、今回SH2153aに所属する堆積層(床面直上層)と判断した。本建物の貼床層出土遺物はSH2153aで報告するようにし、詳細をSH2153aで説明しているが、一部まだ混



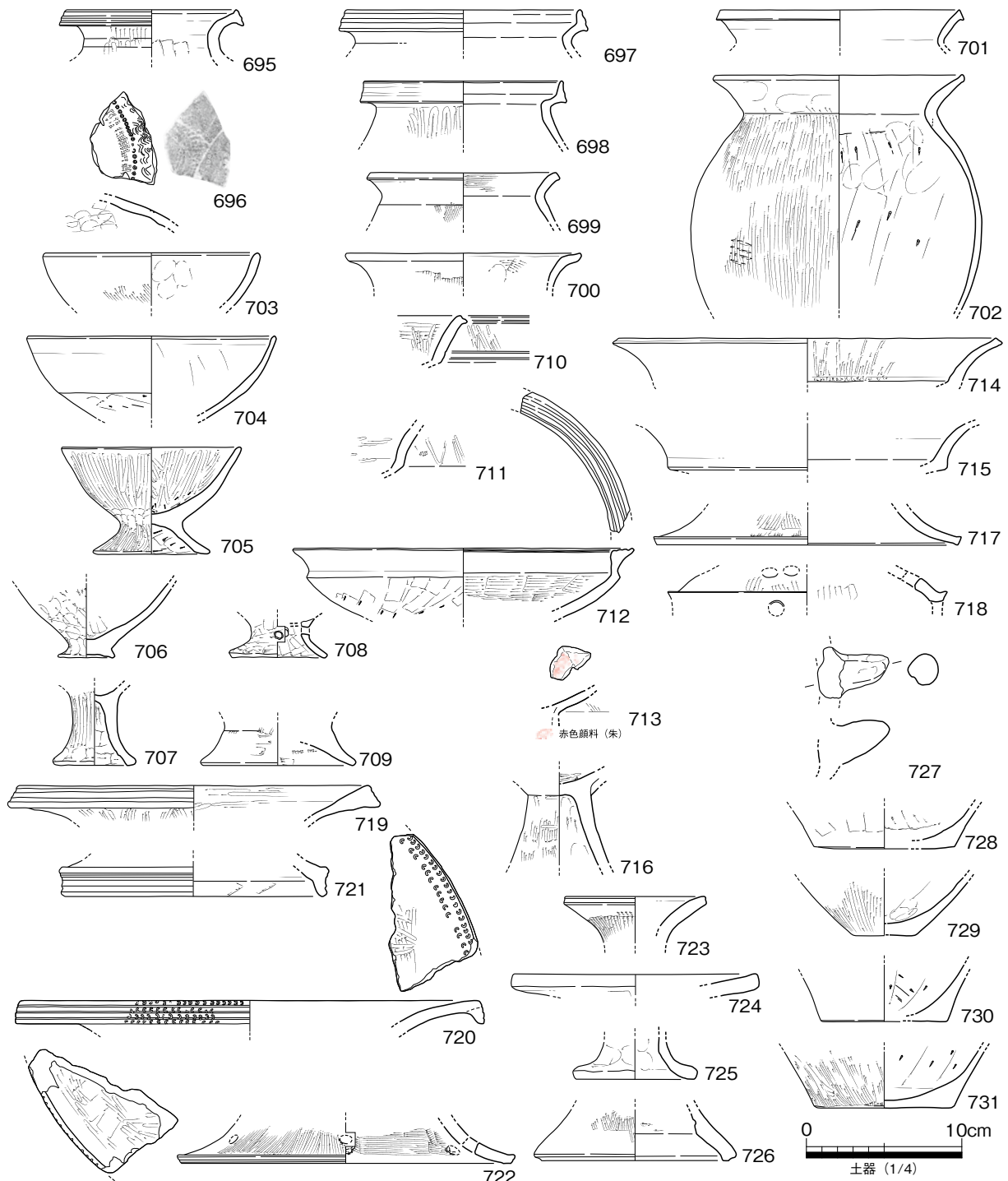
第 86 図 竪穴建物 SH2057a 平・断面図 出土遺物実測図



第 87 図 竪穴建物 SH2075a 平・断面図

在しており、ここで個別に注釈する。

また、後述する 702 の甕は SK2300a 南に隣接する床面でまとまって出土した。床面の下位には SH2153a の埋土及び掘立柱建物 SB2392a を構成する柱穴 SP2219a が重複する。記録では SP2219a が SK2300a を切るように作図されているが、甕 702 の分布範囲が SP2219a の掘方内まで広がることと、SP2219a の柱痕が断面最上部まで直線的に伸びており、本建物床面レベルにおいて広範囲に SP2219a の柱を抜き取るための掘削が及んでいた可能性はないと判断されることから、SK2300a が後出するも



第 88 図 竪穴建物 SH2075a 出土遺物実測図 1

のと推察し、SH2153a・SB2392a → 本建物と判断した。

<出土遺物>

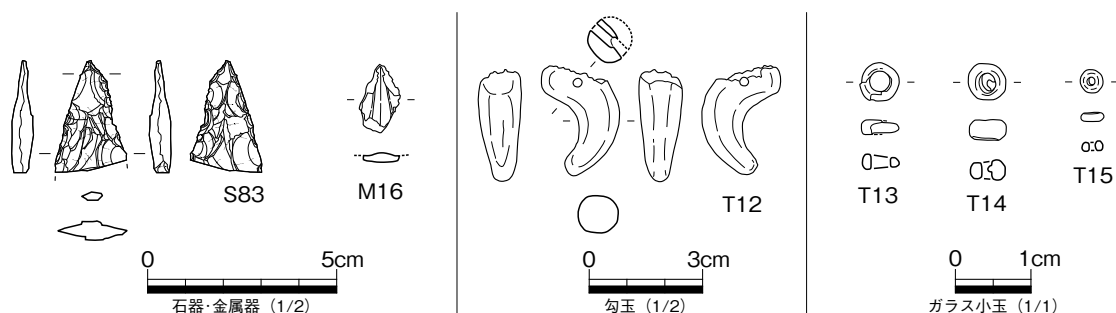
土器は口縁部に凹線文を施文する短頸の広口壺 695 がある。頸部の屈曲は緩慢でスムーズに口縁部に接続することから、後期前半中段階～新段階に属す。696 は壺肩部に櫛描文（簾状文・波状文）と竹管刺突文を施しており、中期の混在か。甕は後期前半古段階の 697、前半新段階～後半古段階の 698、後半古段階の 699～702 がある。703・704 は器壁厚めの直口鉢で 703 は床面出土である。705～709 は台付鉢である。後期後半古段階に属す。710～717 は高杯で、710・714 は口縁端部を面取し後期後半古段階の特徴をもつ。712 は上層出土の混在品である。713 は焼成前に杯部内面にベンガラを塗布し、そのベンガラ面の窪みに焼成後に付着した赤色顔料（朱）が遺存する。716 は分割整形痕跡が明瞭である。718 は装飾高杯。719 は貼床層出土の器台である。拡張した口縁部に凹線文を施しており後期前半古～中段階のバリエーションに含まれる。720 は竹管文による細かな装飾を加えた器台である。後期後半古段階に残る属性である。723～726 は支脚。727 は土製匙の把手である。

S83 はサヌカイト製の大形打製石鏃の半折品である。側縁調整加工が粗放で加工途上の折損と推察する。床面出土。M16 は床面出土の銅鏃である。錆化が進行し遺存状態はよくないが中心に鑄をとどめ、連鑄式で製作されたことが分かる。鉛同位体分析の結果、これまで知られている弥生時代後期銅鏃の普遍的分布域である a、a' の中国華北産材料領域に含まれることが判明している（第 4 章第 5 節 2）。T12 は石製勾玉である。垂定形（木下 1987）で側面は尾側が窄まる形態。蛍光 X 線による半定量分析で酸化マグネシウム（MgO）が 36.8% 出現しており、蛇紋岩と同定された（第 4 章第 4 節 2）。穿孔は両側から行われ、上下でずれがみられる。レプリカによる SEM 観察で回転研磨痕が不明瞭であることから穿孔具は鉄針と推定される（第 4 章第 4 節 3）。

T13 は貝製小玉である。貝製小玉は縄文時代から古墳時代にかけて国内の海浜地域において散見される遺物である。縄文併行期の沖縄地域や弥生前期から中期にかけての出雲地域等で知られており、この貝製小玉はサイズ的には後者の例に近い。島根県松江市の西川津遺跡では 48 点の貝製小玉が出土しており、大きさのばらつきがある（島根県教委 1989）中で、本資料は中間的なサイズに収まる。後期に所属するものとして例は少ない。

T14・T15 は淡青～青緑色の K_2O-SiO_2 系カリガラスを原料とするガラス小玉である。大小の法量差はあるが発色が同じであることから、同一原料から製作されたものと考えられる。管の引き伸ばし切断後、再加熱により整形する。T14 の孔内には微小なガラス粒が溶着する。再加熱時の混入であろう。

本建物の所属時期は 702 の甕が示す後期後半古段階である。その出土状況が 2 区東端建物密集域における重複関係を紐解く鍵となることは上述したとおりである。層位関係は図や写真を基にして検証し

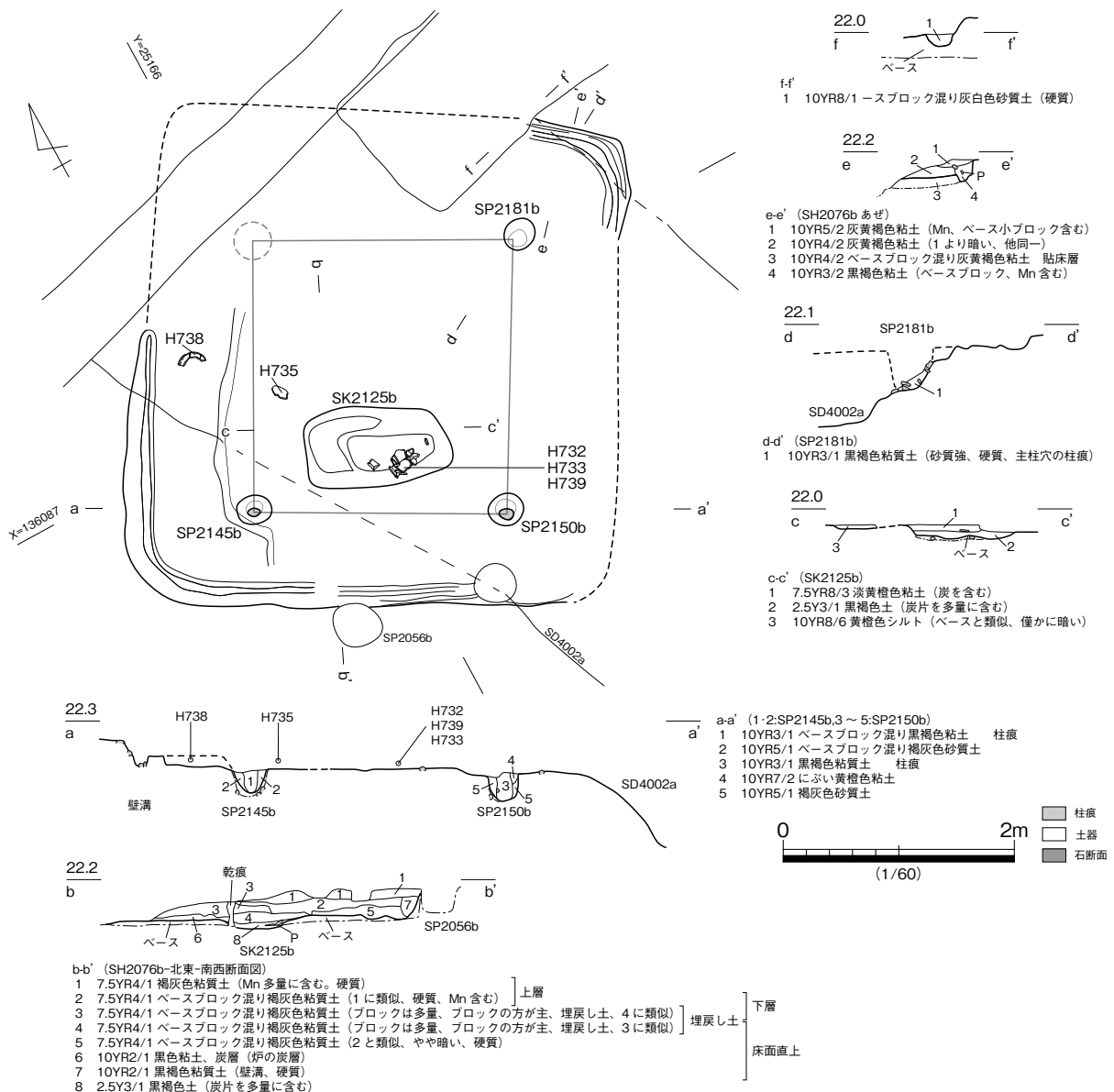


第 89 図 竪穴建物 SH2075a 出土遺物実測図 2

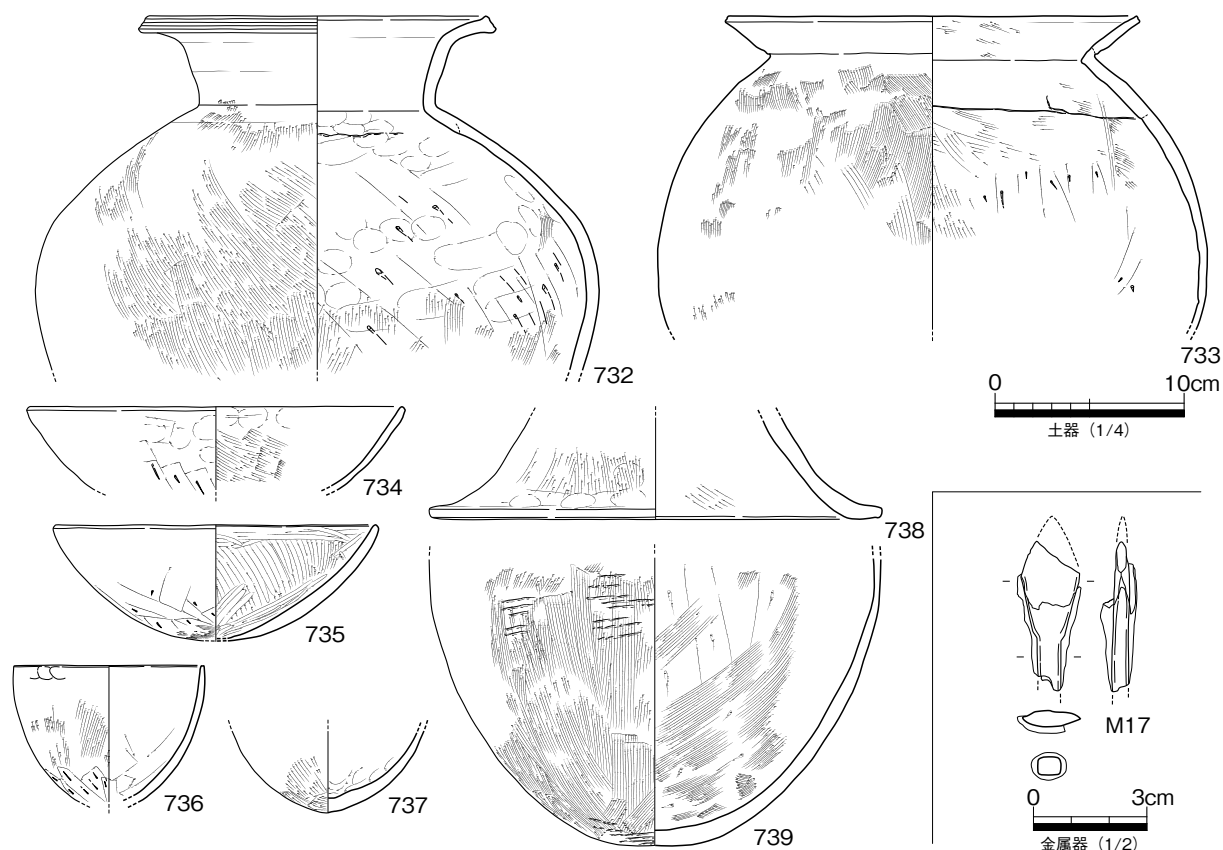
各遺構の前後関係が判明した。建物変遷は掘立柱建物 SB2392a、後期前半古段階で辰砂鉱石が出土した SH2153a、それを切る後期前半中段階の SH2346a、さらに後期前半新段階の SH2010a、これ以後掘方が深くなり床面レベルが下がるとともに堅穴部の重複を避ける傾向が認められ、後期後半古段階の当該 SH2075a と近接する SH2149a、後期後半新段階の SH2038a と SH2057a、終末期古段階の SH2087a の順にほぼ同じエリアに継続して堅穴建物が構築される。

(30) SH2076b

2区北西の建物密集域の中で北西端に配された一辺4.3mの方形堅穴建物である。推定床面積は、18.5㎡である。南端の一部を後続する堅穴建物 SH2077b に切られる。支柱穴 (SP2181b・SP2150b・SP2145b) は4基 (1基は攪乱により消滅) で、中央南西寄りに炉跡 SK2125b がある。炉底には多量の炭が残されており、水洗抽出した 2086.6g の炭化物の一部が燃料材としてサカキ、アカガシ垂属、コナラ節、クヌギ節に同定され、モモ核 15 点も併せて出土した (第4章第2節4)。炉が存在する側を除



第90図 堅穴建物 SH2076b 平・断面図



第 91 図 竪穴建物 SH2076b 出土遺物実測図

く三方に貼床によるベッド状遺構が構築される。床面及び炉跡内で廃絶時に投棄された土器が出土した。
 <出土遺物>

732 の壺は短頸の広口壺の系譜で口縁端部を拡張気味に仕上げる最終形態で終末期古段階を下限とする。733 の甕は胴部が強く張り球胴化傾向が強い終末期に属す。734 ~ 737 は終末期古段階の直口鉢である。738 は高杯脚部と推定する。大型となることから、終末期古段階を下限とする土器である。

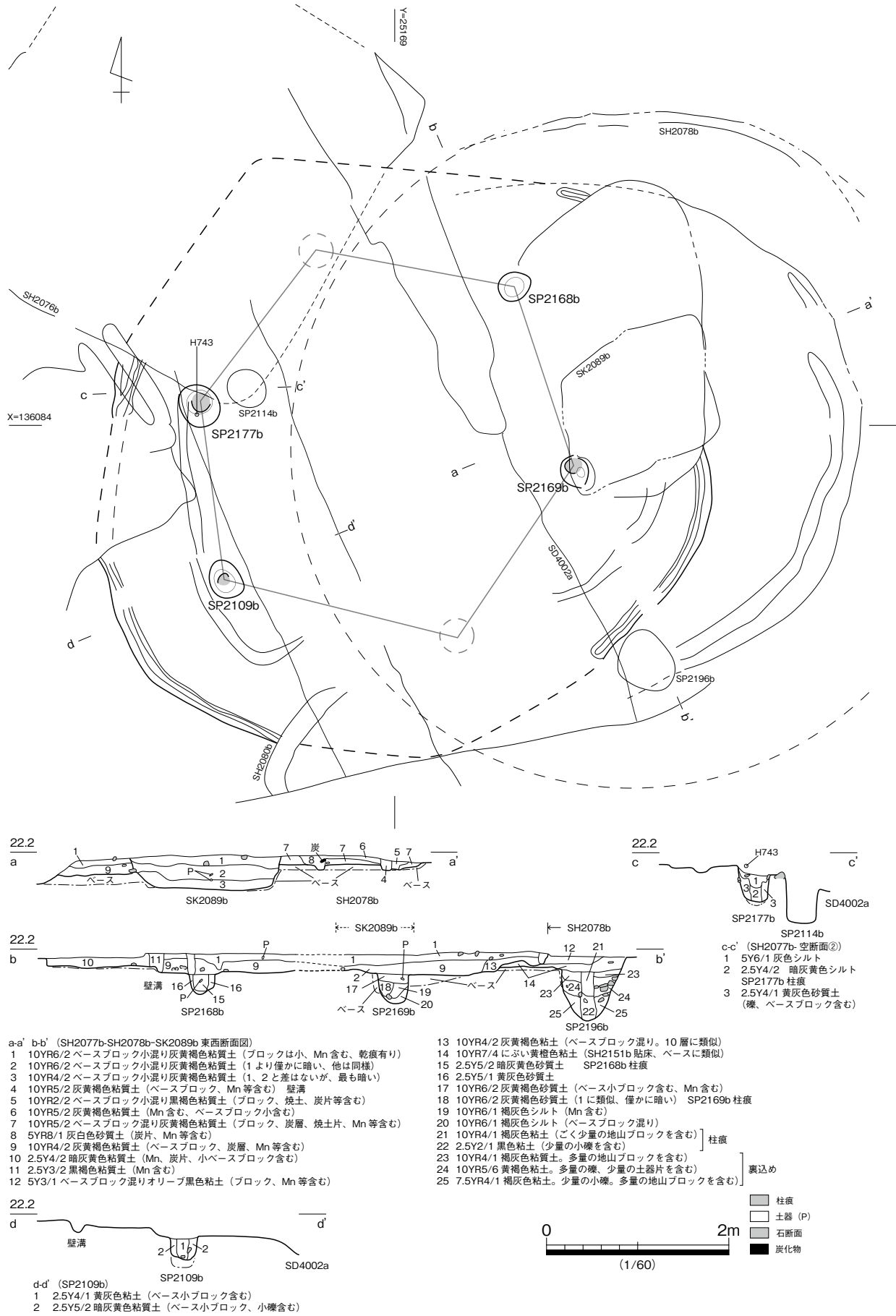
M17 は柳葉有茎形の鉄鏃である。壁溝内で出土した。

方形で炉が一方に偏り、それ以外の三方に高床部を構築する典型的な終末期の在在系竪穴建物の床面様式である。出土土器から終末期古段階に廃絶した建物と判断した。

(31) SH2077b

2 区北西の建物密集域の中で西端に配された長径 6.8 m の多角形竪穴建物である。推定床面積は 34.9 m² を測る。条里方向の溝 SD4002a に中央付近の大部分を切られ、東は SH2078b と、北は SH2076b と、南は SH2080b と重複し、切り合いから最も新しいと考えられる。なお、調査記録では土坑 SK2089b に切られている。

主柱穴は 6 個が想定され、うち 4 基 (SP2177b・SP2109b・SP2169b・SP2168b) が遺存する。ベッド状遺構は b ライン断面の 13 層にその痕跡を認めるが、あまり明確ではない。主柱穴 SP2177b の柱痕跡の床面で完形の鉢が出土した。



第92図 竪穴建物 SH2077b 平・断面図

<出土遺物>

740 は口縁部に凹線文を施す広口壺である。後期前半の混在品。741・742 は口縁部形態から終末期の甕である。743～747 は直口鉢で、うち 743 は床面出土品である。745 は口縁端部が面取りされており後期後半に属すが、外は終末期である。748・748 は口縁部が短く外反する鉢、749 は口縁部が内側に短く屈曲する鉢である。いずれも口縁端部の形態から終末期に属す。752 は器壁が薄い器台口縁部で後期後半に属す。741・745・747・748・750・752 が胎土 H である。

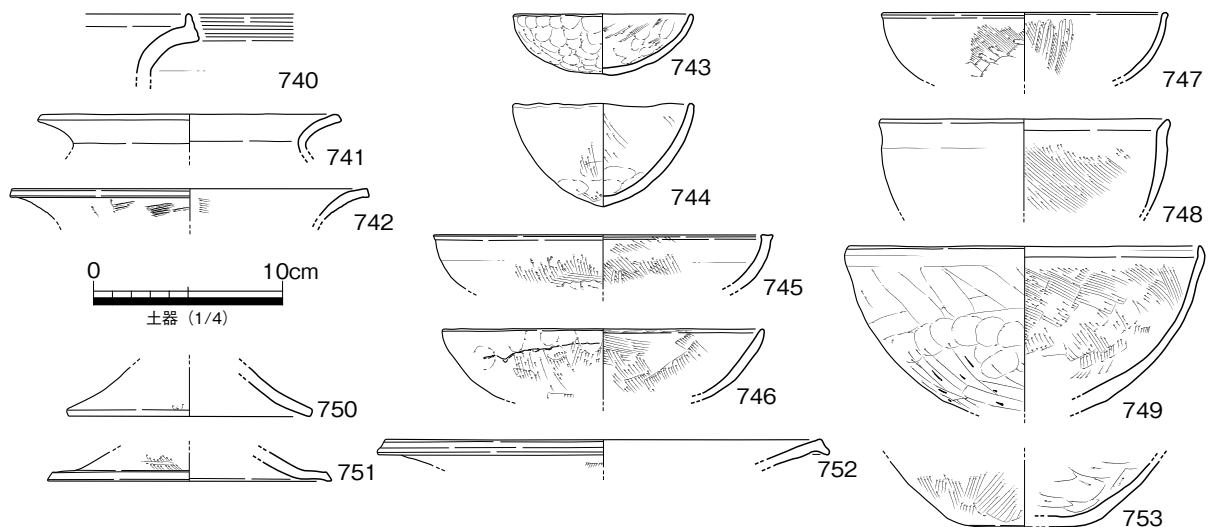
出土遺物は後期後半から終末期にかけて幅があるが、床面出土の 743 の鉢が示す終末期新段階が本建物の廃絶時期とみなしうる。遺構の残存状態は悪いが、終末期新段階に下る多角形竪穴建物珍しい。胎土 H の土器が多い点も終末期の特徴の一つである。

(32) SH2078b

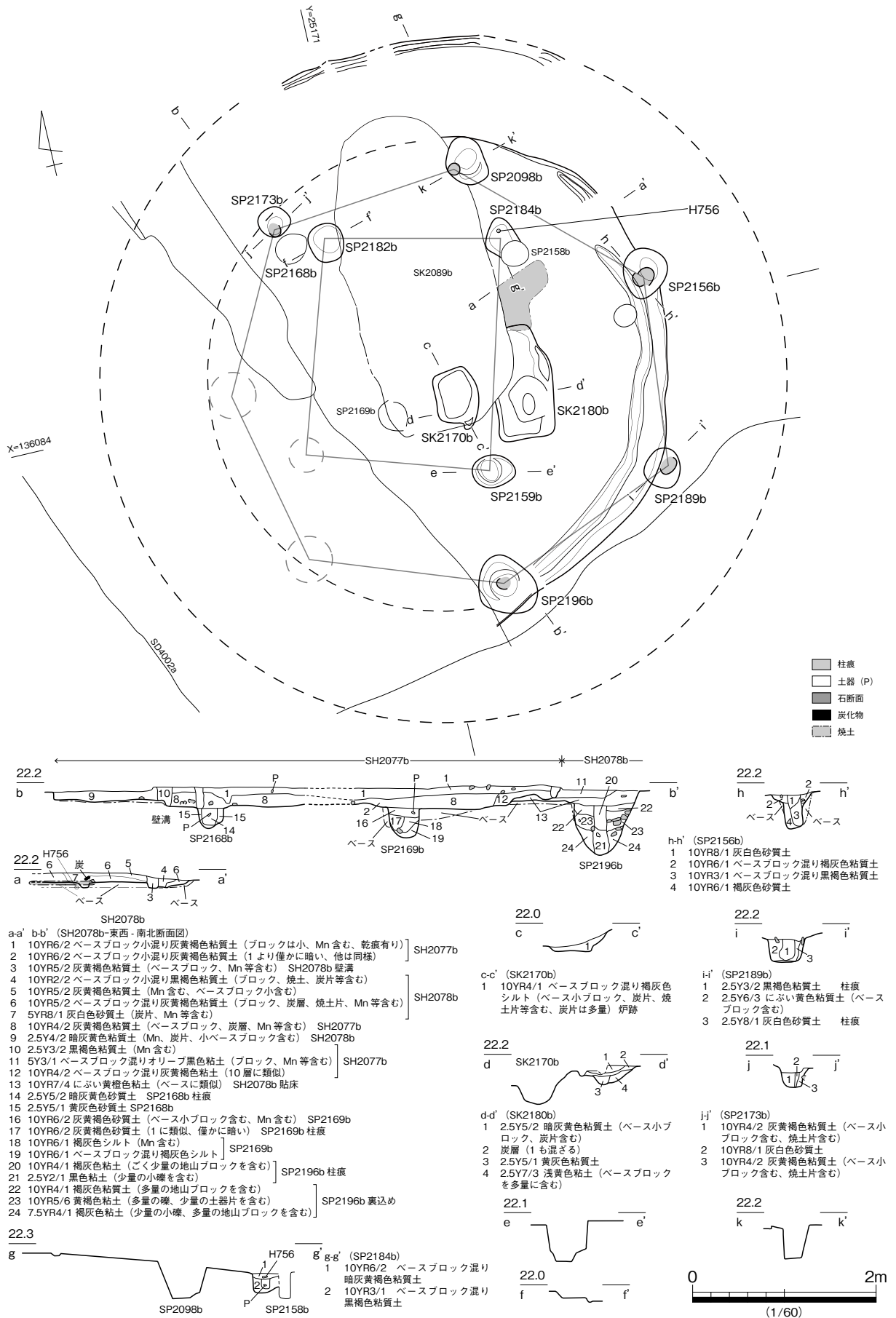
2 区北西の建物密集域の中で中央に配された長径 7.4 m の円形竪穴建物である。推定床面積は 43m²を測る。条里方向の溝 SD4002a に掘方西 3 分の 1 を切られ、東は SH2303b・SH2053b と、西は SH2077b と重複し、いずれにも切られる。また土坑 SK2089b に切られる。

主柱穴は 7 基で構成する a 列と、4 基で構成される b 列の 2 列が推定される。そのうち a 列 5 基 (SP2173b・SP2098b・SP2156b・SP2189b・SP2196b) と、b 列 3 基 (SP2182b・SP2184b・SP2159b) が遺存する。a 列は壁溝状の溝と重複しており、ベッド状遺構の高床部との間仕切溝と推定できる。

主柱穴列の 2 列に対応して中央土坑も 2 基確認した。SK2170b は古墳時代前期古段階の土坑 SK2089b に上部を切られ、下部のみ残存し床面からの深さは 0.45 m。埋土中に炭片・焼土を含むいわゆる灰穴炉である。一方 SK2180b は長さ 1.25 m、幅 0.65 m の長方形土坑で深さは 0.18 m とやや浅い。埋土中に大量の炭が遺存する。両土坑は重複することなく隣接して存在し配置的にはいわゆる一〇土坑の様相を呈し互いに関連する遺構である。埋土の炭化物を洗浄抽出し SK2170b からサクラ属、SK2180b からコナラ属クヌギ節、ヤマグワが燃料材として同定された。また SK2170b からモモ核 1 点が出土している (第 4 章第 2 節 4)。なお、SK2180b の北側には床面に長径 0.8 m の範囲に炭化物の広がりを確認した。



第 93 図 竪穴建物 SH2077b 出土遺物実測図



第94図 竪穴建物 SH2078b 平・断面図

上記2基の土坑については同時併存の可能性が高いが、支柱穴列については遺構の配置状況からみて7基からなるa列が間仕切の位置と合致しており、床面の当初設計に含まれ、b列の柱が新たに設置された柱の可能性が高い。

<出土遺物>

754・755は中期後半新段階に所属する壺で混在品である。雲母片を多く含む胎土Hbの土器である。756はb列柱穴出土の長頸壺、後期後半古段階に属す。757は備中産の丹塗壺、758は丹塗無頸壺である。758はb列柱穴出土。760はb列柱穴出土の甕である。後期後半古段階に属す。761～764は高杯で761～763は後期前半古段階、764は後期前半新段階を上限とする。761・762がb列柱穴、763・764はa列柱穴で出土。765はb列柱穴出土の器台である。764は下川津B類高杯で後期後半古段階に属す。

S84は大形のサヌカイト製石鏃未製品である。打製石剣の可能性も残す。M18は上端が開く器形の棒状鉄片である。鉄鏃の可能性もあるが、法量的に大きすぎる。M19は中世以後の鉄釘の混在品。

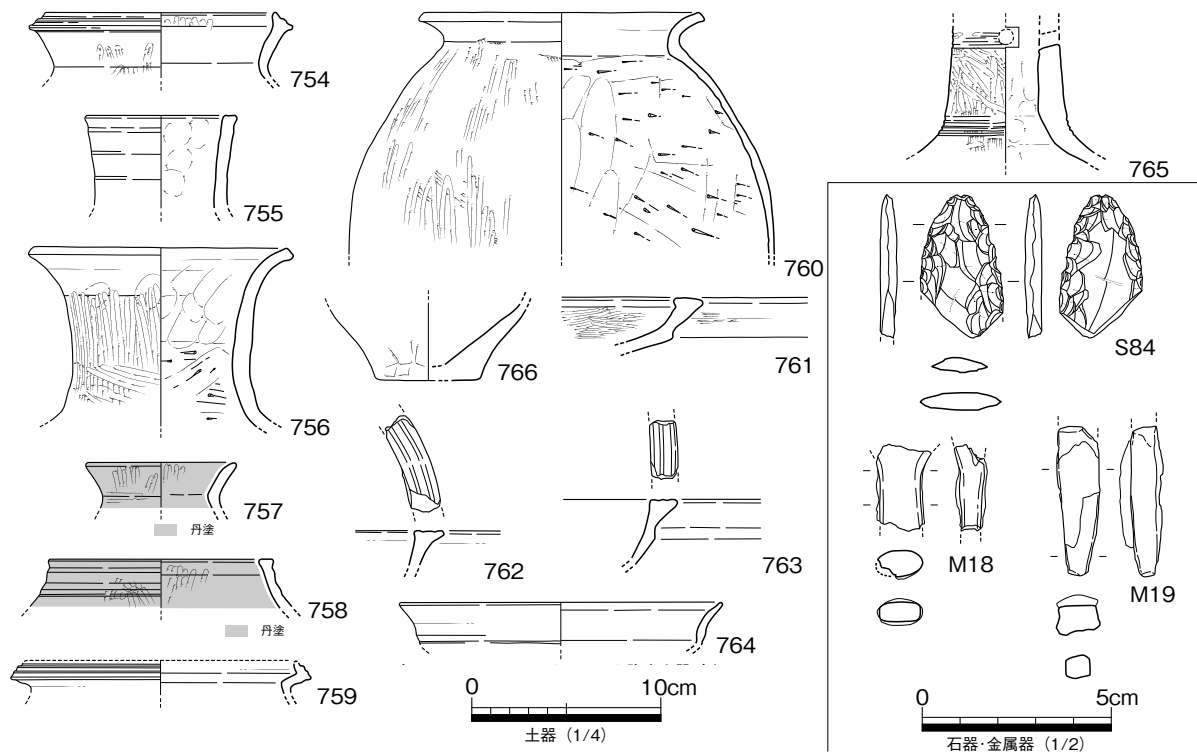
b列の支柱穴が廃絶時の柱であることは間違いない。そのb列に所属するSP2184bの柱抜き取り後の窪みで出土した土器が756の長頸壺である。外にb列出土の出土遺物を考慮すると、後期後半古段階に廃絶した竪穴建物と判断した。

(33) SH2080b

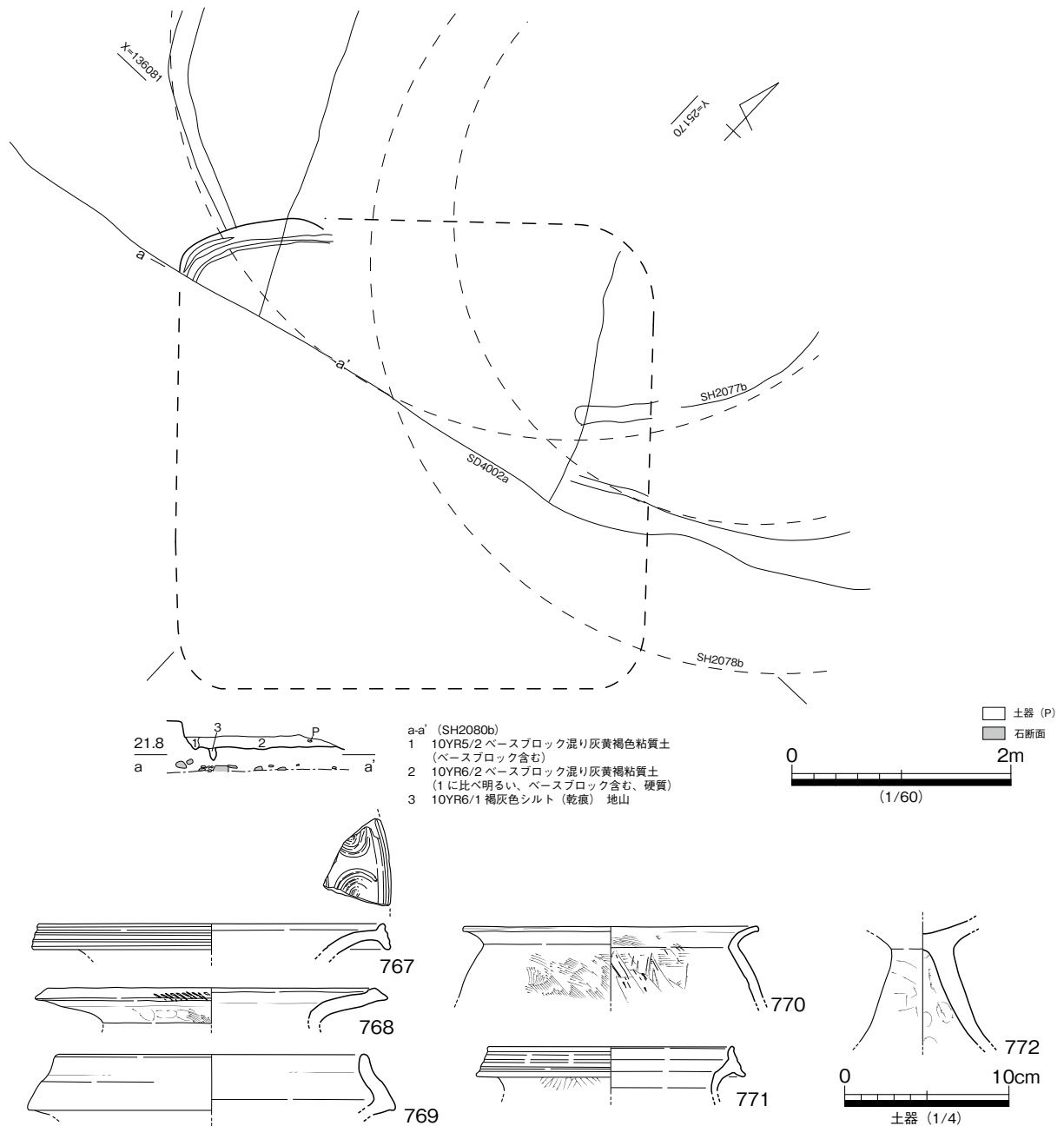
2区北西の建物密集域の中で南西隅に位置する隅丸方形の竪穴建物である。大部分を溝SD4002aや竪穴建物SH2077bに切られ、北西隅の壁溝のみ残存する。

<出土遺物>

767は中期後半中段階の混在品。768は頸部が「ハ」字状を呈する広口壺である。口縁端面に弱い刻目を施す。769は複合口縁壺で端面は無文。これらは終末期古段階を下限とする。770は終末期の甕で



第95図 竪穴建物 SH2078b 出土遺物実測図



第96図 竪穴建物 SH2080b 平・断面 出土遺物実測図

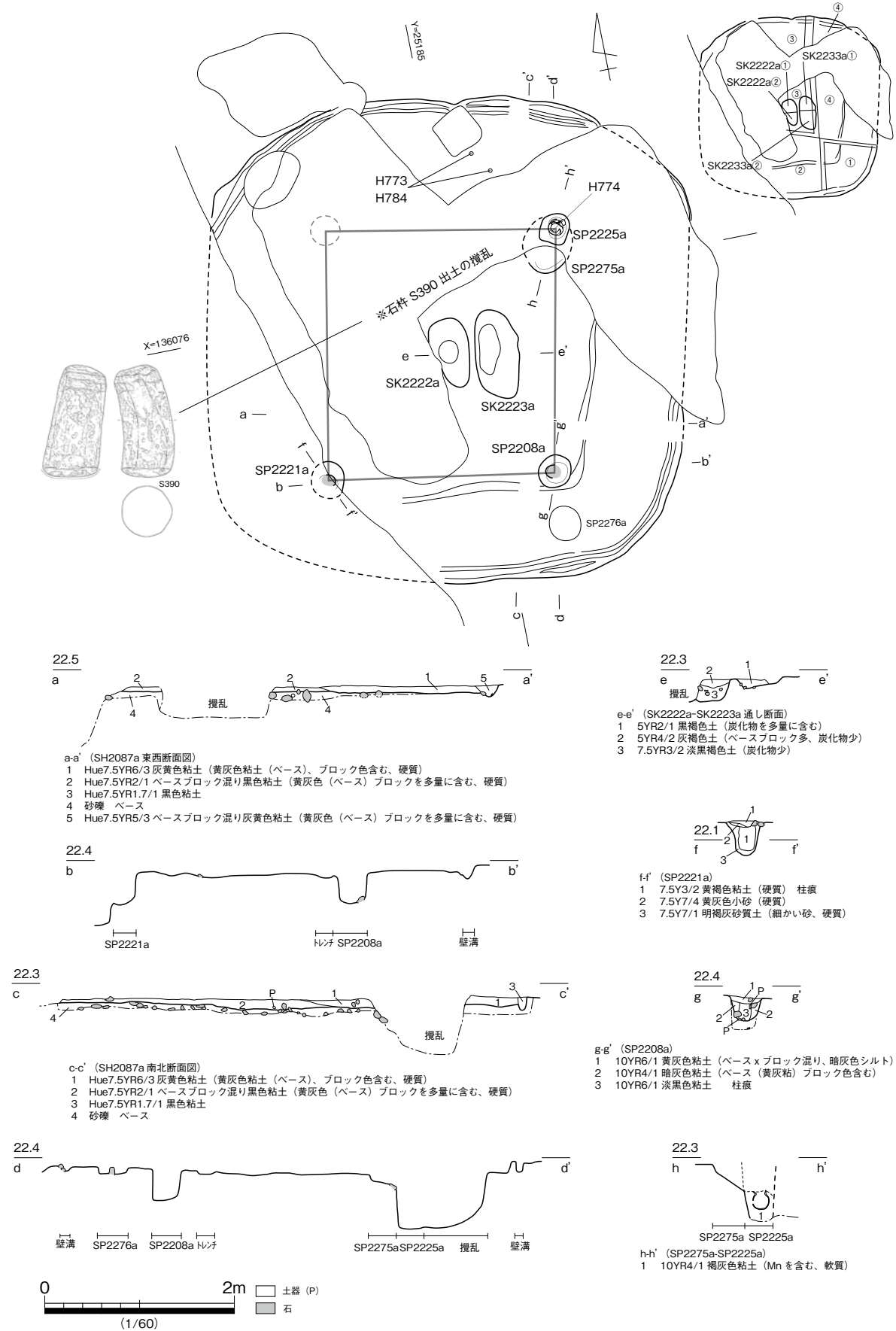
ある。771 は後期後半の備後系の甕である。

出土遺物より終末期古段階に廃絶した竪穴建物と判断した。

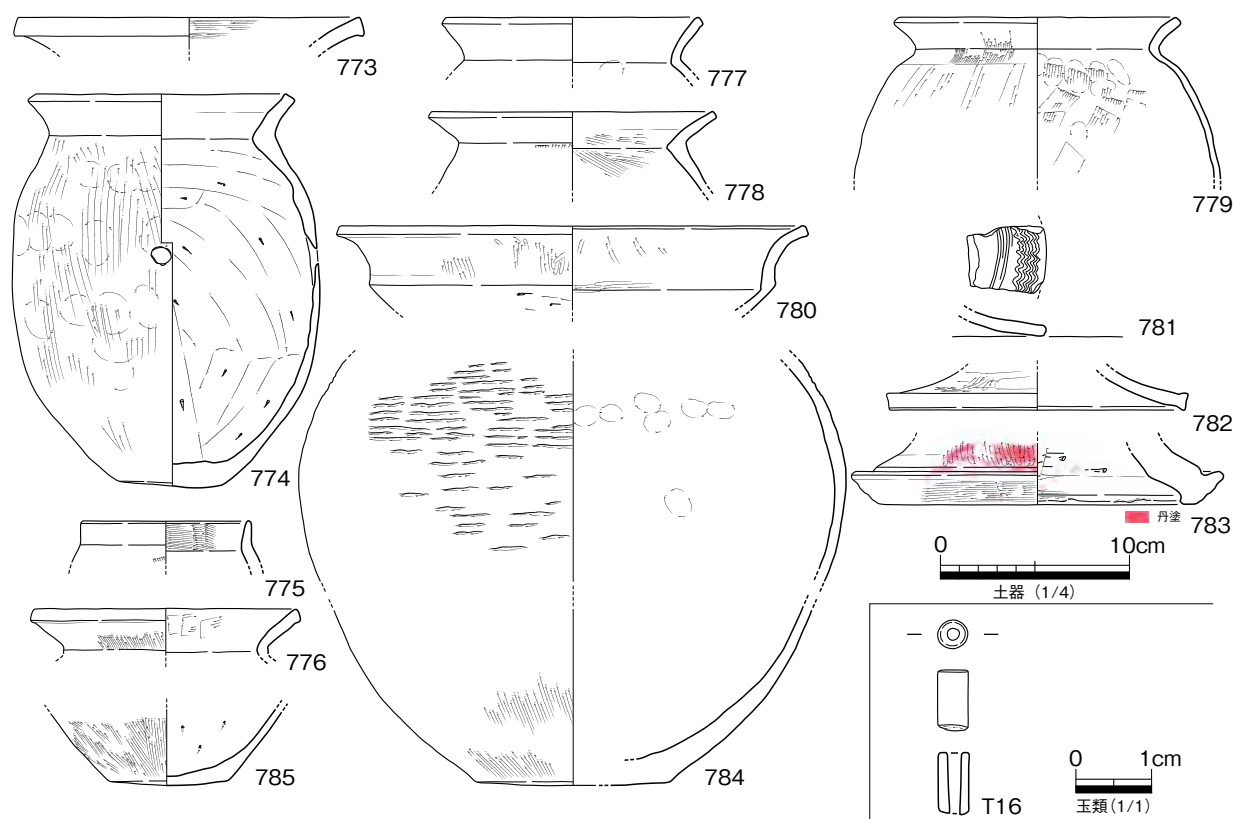
(34) SH2087a

2区東側竪穴建物集中域の西端に立地する隅丸方形の竪穴建物である。北東側で後期後半古段階の竪穴建物 SH2075a を切る。一辺 5.1 m で推定床面積は 26m²を測る。支柱穴は 4 基のうち 3 基 (SP2225a・SP2208a・SP2221a) が残存し、1 基は攪乱で滅失する。四方にベッド状遺構を構築し、下段部中央やや東寄りに深めの土坑 SK2222a と、浅く長楕円形の土坑 SK2223a の 2 基を整然と配置し、一〇型中央土坑の様式を呈す。浅い土坑には多量の炭化物が残される。

支柱穴 SP2225a の柱抜き取り後に 774 の甕が投棄されていた。また隣接する SP2275a は抜き取り時の掘方である。



第 97 図 竪穴建物 SH2087a 平・断面図



第98図 竪穴建物 SH2087a 出土遺物実測図

<出土遺物>

773は後期後半古段階の長頸壺口縁部、774～779は甕である。このうち柱穴や床面出土の774・779は口縁部内面の胴部境稜線が緩い後期後半新段階の甕で、トレンチ出土の778のみ終末期古段階に下る形態を有す。774の甕は胴部最大径付近に焼成後外面側からの打撃により穿孔を施す。780～783は高杯である。783は内外面丹塗りの備中系土器で器台の可能性もある。

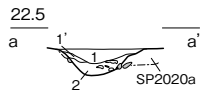
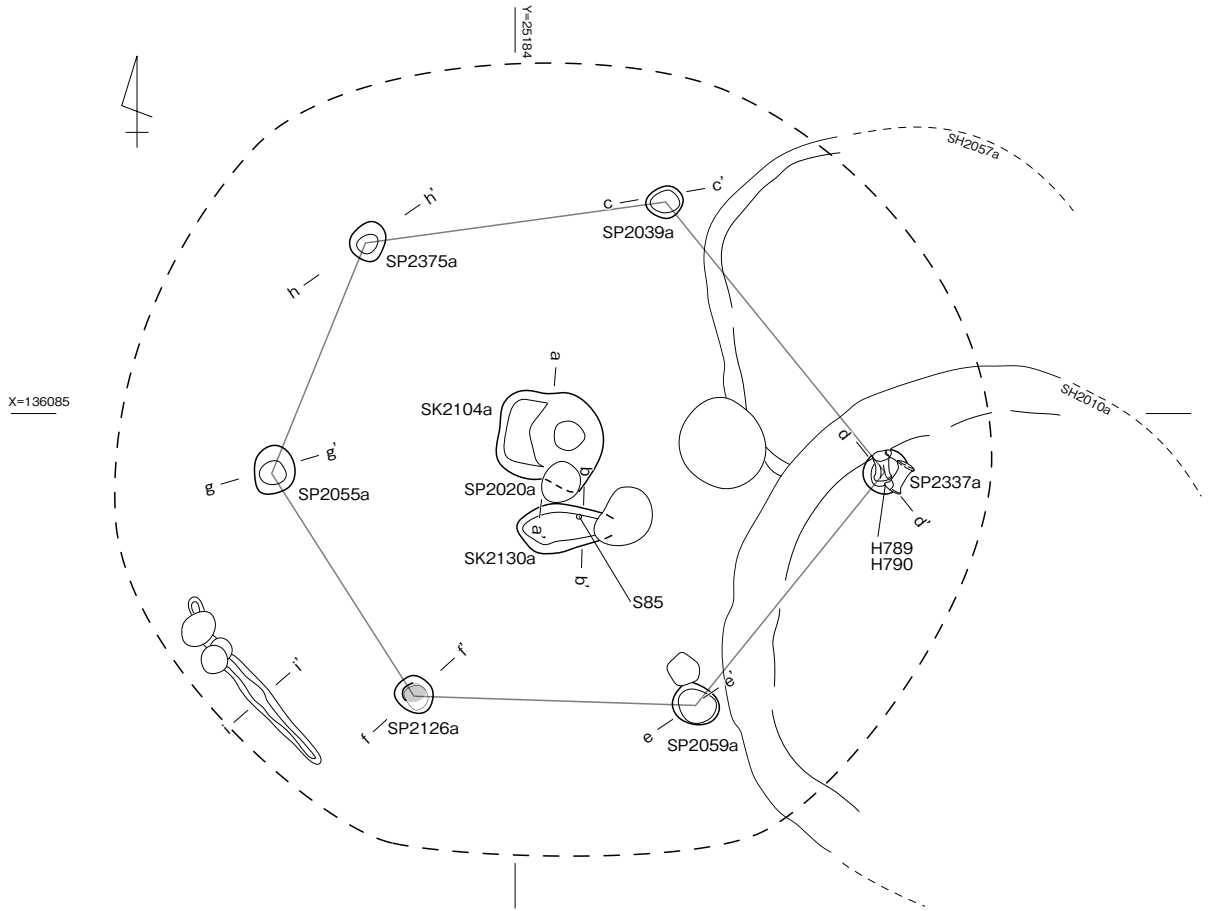
T16は碧玉製の管玉である。片側穿孔で孔内のレプリカ法によるSEM観察の結果、回転研磨痕跡が目立たず、鉄針による穿孔と推定された（第4章第4節3）。片側穿孔としては本遺跡で最も古い遺物である。原産地分析の結果石川県小松市南部の滝ヶ原原産地と判定された（第4章第4節5）。滝ヶ原原産地は小松市街地から南約10kmで菩提原産地に近く、原石は女代南B遺物群のバリエーションの一つとされる。石川県八日市地方遺跡出土の弥生時代玉造関連遺物との関係も考えられる。

柱穴内及び床面で出土した土器は後期後半新段階の土器であることから、当竪穴建物の廃絶時期は後期後半新段階と判断した。

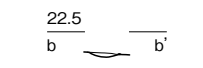
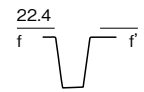
なお、本建物を切る攪乱よりS390の石杵が出土している（「第4節遺構に伴わない遺物」で報告）。石杵は断面が円形でハンドル状にねじれた立面形を呈し、下端の研磨面は強く揺られ朱粒が僅かに残る。後期後半新段階の本竪穴建物に所属していた可能性が極めて高い。

(35) SH2149a

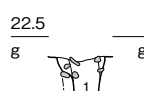
2区東側竪穴建物集中域の北西端に位置する多角形の建物である。主柱穴は6基で中央に一〇型中央土坑様式の土坑が2基（SK2104a・SK2130a）配置される。壁溝が一部残存するのみで、床面は残らない。



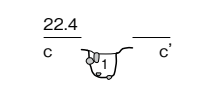
a-a' (SK2104a)
 1 10YR5/2 灰黄褐色粘土 (ごく少量の地山ブロック含む)
 2 10YR4/2 灰黄褐色粘土 (多量の土器片を含む)



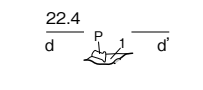
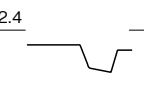
b-b' (SK2130a)
 1 10YR3/1 黒褐色粘質土 (多量の炭を含む)



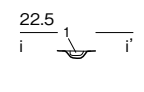
g-g' (SP2055a)
 1 2.5Y3/2 黒褐色粘土 (締まり、粘性ともに強い。地山ブロックを少量含む)



c-c' (SP2039a)
 1 10YR3/2 黒褐色粘土 (締まり、粘性ともに強い。ごく少量の地山ブロック含む)

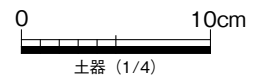
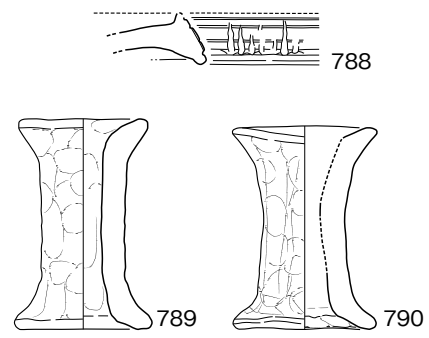
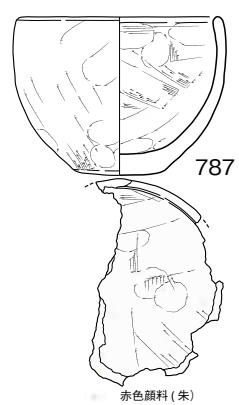
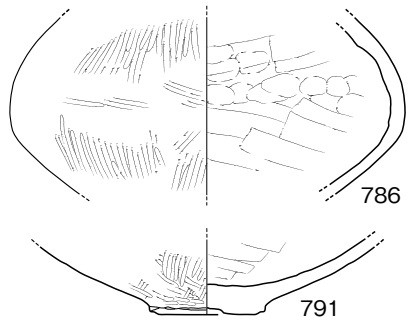
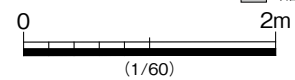


d-d' (SP2337a)
 1 10YR2/2 灰黄褐色粘質土 (地山ブロックを多く含む。支脚 2 点出土)



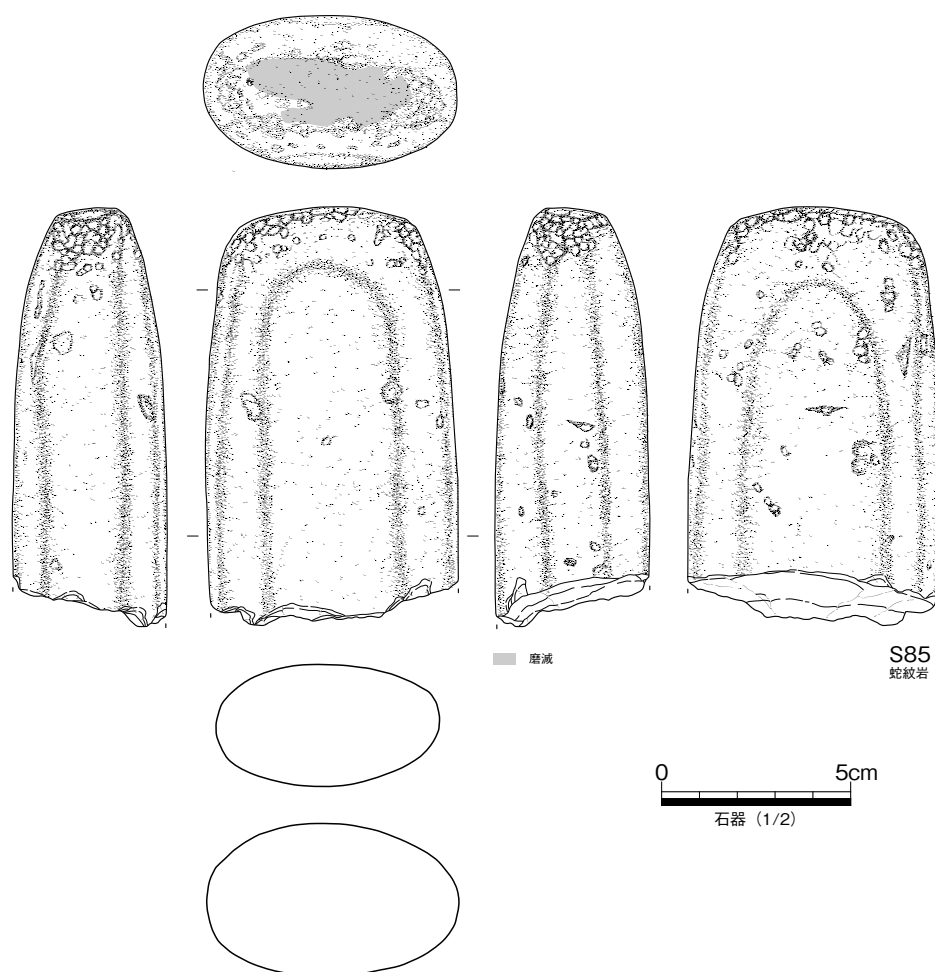
i-i' (SH2149a 壁溝)
 1 10YR5/2 灰黄褐色粘土

□ 土器 (P)
 ■ 石断面



赤色顔料 (朱)

第 99 図 竪穴建物 SH2149a 平・断面 出土遺物実測図 1



第100図 竪穴建物 SH2149a 出土遺物実測図2

壁溝の位置関係から床面積 35㎡を推定した。

<出土遺物>

体部が玉葱形で平底の壺（786・791）、底部平底の直口鉢（787）、口縁部拡張の器台（788）、器台形支脚2点（789・790）はいずれも後期前半新段階に属す。787は内面に赤色顔料（朱）が付着する。

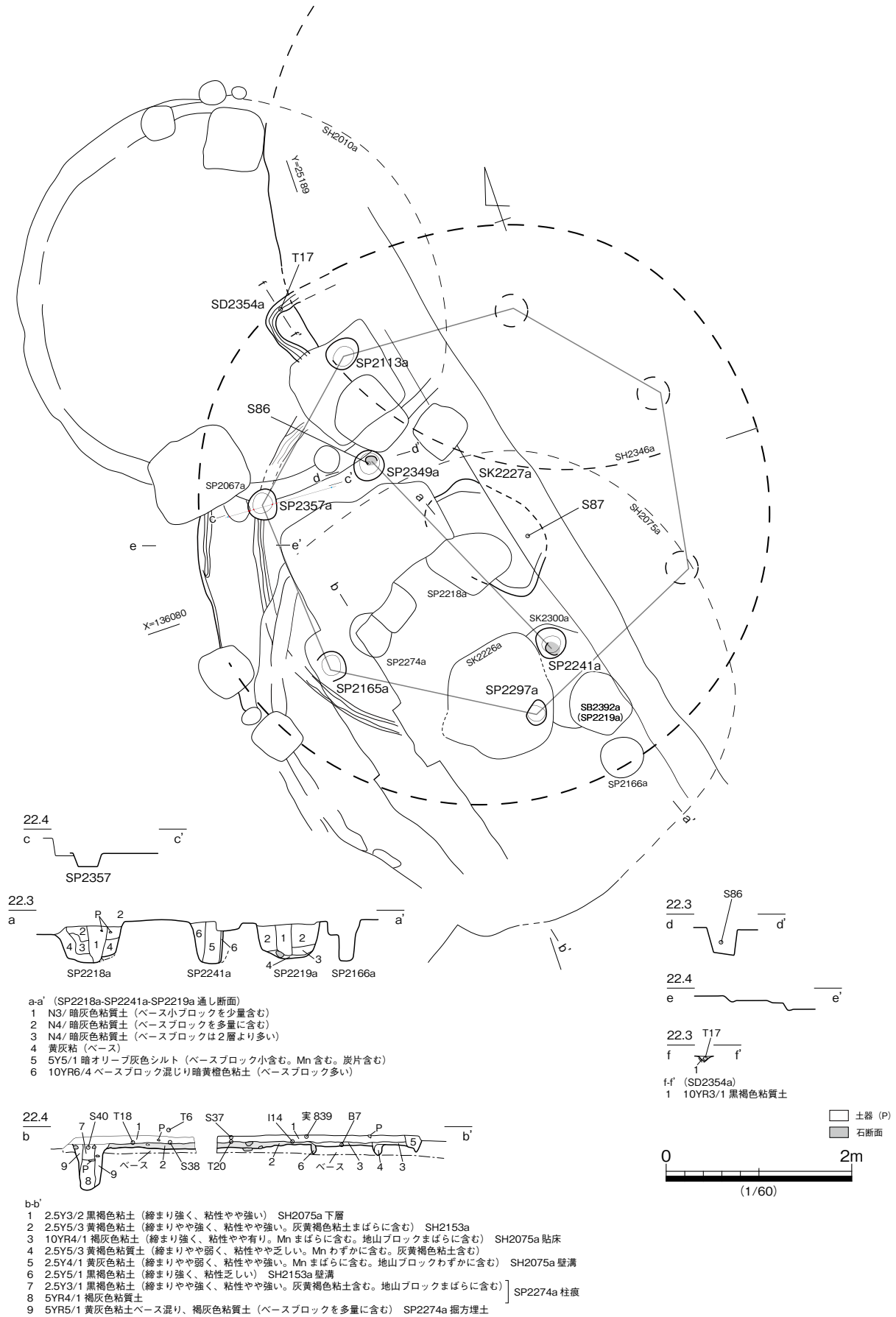
S85は太形蛤刃石斧基部片である。石質は石英の細脈が貫入する蛇紋岩。基部小口は緩やかにカーブする研磨面である。

出土土器から後期前半新段階に廃絶した建物である。隣接する SH2075a に先行する。

(36) SH2153a

2区東側竪穴建物集中域の中央に位置する円形竪穴建物である。東を後期前半中段階の SH2346a に、北側大部分を後期前半新段階の SH2010a に、南側の大部分を後期後半古段階の SH2075a に切られる。床面にまだ貼床層が遺存した段階で掘立柱建物 SB2392a の西側側柱列を検出しており、後述のように出土遺物からみて本建物が古い。なお、中央付近から南にかけて配管による攪乱により一部で床面が遺存しない。

直径 6.2 m で推定床面積は 30㎡を測る。幅 0.6 m のベッド状遺構が壁際に備わり、外縁に壁溝、段下との境に壁溝状の間仕切溝を設ける。間仕切溝は一部が約 1 m 北側に突出しており、その部分のベッド



第 101 図 竪穴建物 SH2153a 平・断面図

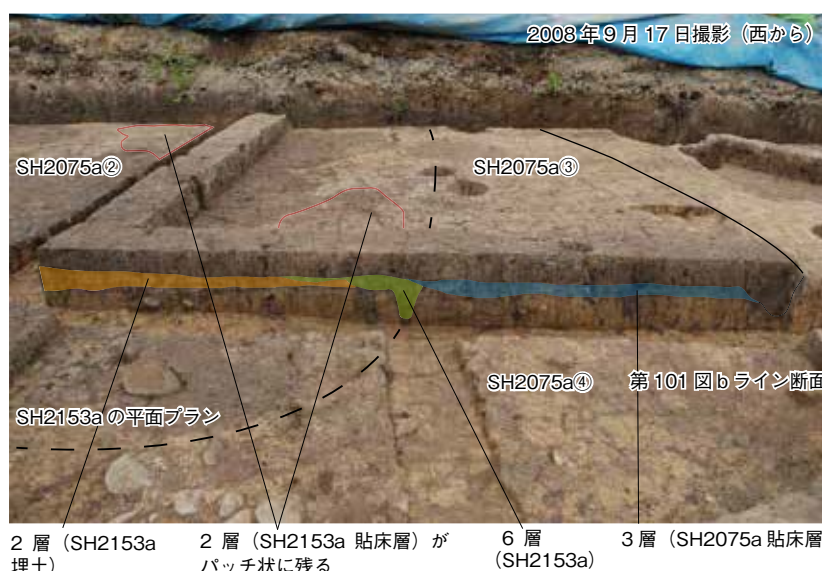
状遺構は途切れる。ベッド状遺構が完全に削平されていれば、突出部付の円形竪穴建物となる。

主柱穴列は2列ある。一つは7基の柱穴で構成し、うち4基（SP2113a・SP2357a・SP2165a・SP2297a）を検出し残りは調査区から東に外れる。もう一つは2基（SP2349a・SP2241a）の柱穴で構成し中央土坑のSK2227aを挟むように配置される。

北側の突出部壁溝の最深部レベルは、内側円形部の間仕切溝の最深部のレベルと同じである。これは、円形部の下段部から突出部へは連続して床面が平坦に続いており、突出部の付け根の側面からベッド状遺構の段が始まっていたことを示す。

なお、調査の過程では重複する建物 SH2075a との前後関係が不明瞭のまま進行したことにより若干の混乱が生じた。本建物では貴重な辰砂鉱石 S88 が出土したのだが、その取り上げ名と調査状況を記録した写真との間に矛盾が生じていることから、以下のとおり調整した。

まず辰砂鉱石 S88 は SH2075a 貼床層として 2008 年 11 月 26 日に取り上げられている。



辰砂鉱石（S88）は「SH2075a②貼床層 20081126」で取り上げられているが、2008年9月17日撮影の本写真によると、SH2075aの貼床層はこの時点で残存していない。下位のSH2153aの埋土または貼床層（bライン2層）がパッチ状に残存することから、辰砂原石は2区完掘写真撮影（11月21日）後にこの貼床層（埋土下位）の掘り下げ中に出土したものと推察する。

2層（SH2153a埋土） 2層（SH2153a貼床層）がパッチ状に残る 6層（SH2153a） 3層（SH2075a貼床層）

SH2153埋土残存部（辰砂鉱石 S88 推定出土位置）※白破線



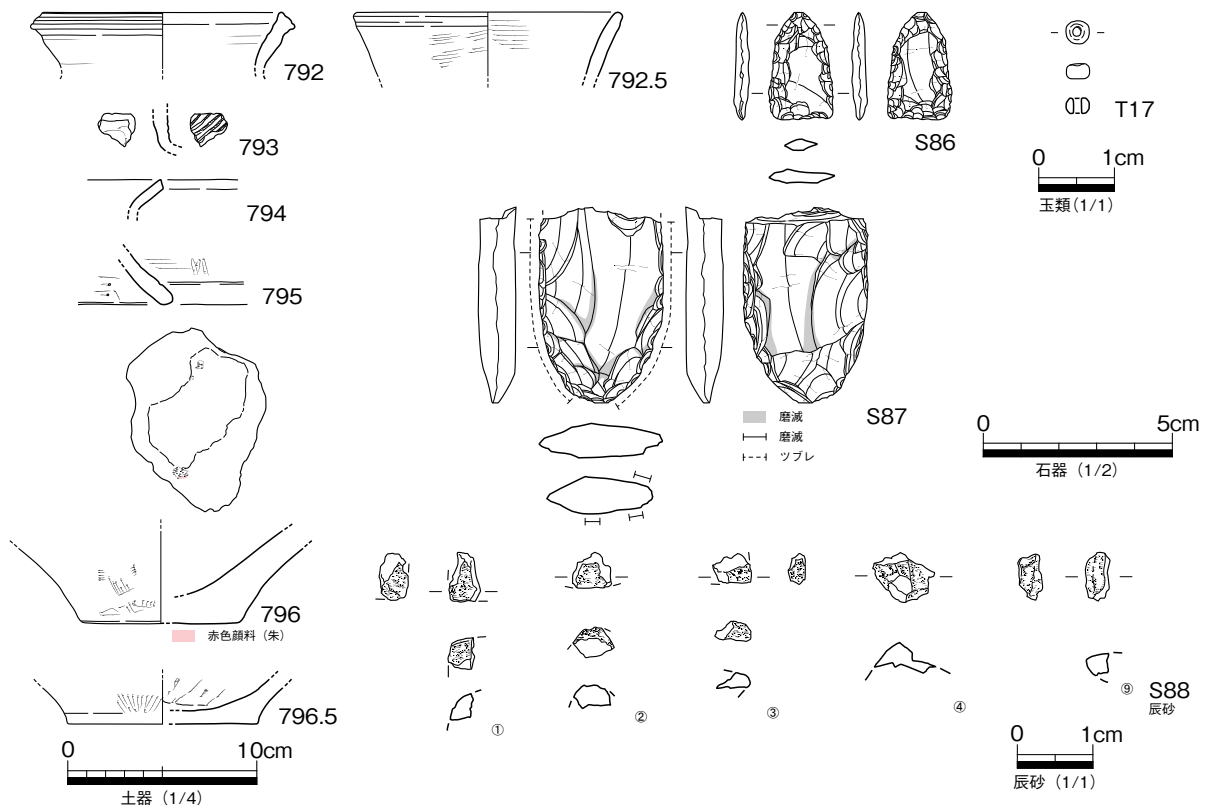
構築順
SH2153a
↓
SB2392a
↓
SH2010a
↓
SH2075a

第102図 SH2153a 詳細写真

SH2075a の調査は 2008 年 9 月 17 日に撮影された写真に十字の断面調査用畦を残しながら埋土を掘り下げたことが示されているが、床面と断面の状況を見ると、すでに SH2075a の床面は本来のレベルより下位まで掘り下げられ、断面で観察できる SH2153a の床面に一部達している。SH2075a の本来の床面を示しているのは、同年 9 月 8 日に撮影された 702 の甕の出土状況写真（写真図版 26）である。基盤層ブロックが混在する写真の検出面が SH2075a の本来の床面である。ちなみに当該 SH2153a を切る掘立柱建物 SB2392a の構成柱穴である SP2219a が同じ場所で重複しており、甕 702 の下位の面は位置的に SP2219a の埋土となる。ただし、SK2300a との切り合い関係は SK2300a が元来浅い土坑であるため誤認され SP2219a が切るように調査が進められているが、実際は逆である。同様に SH2153a の支柱穴 SP2241a も SK2300a を切るように調査が進んでいるが、10 月 16 日撮影の SP2241a 写真（写真図版 29）では柱裏込め土である暗黄橙色粘土（第 101 図 a ライン 6 層）の南側ラインが 10cm ほど広がることを示されており、SP2241a は SK2300a 構築前の遺構であることが明らかである。

このように SH2075a の調査が進み、11 月 21 日には掘立柱建物 SB2392a も完掘した状態で全景写真が撮影されている。SH2153a に関わる堆積層もほとんど残っていないが、写真では僅かに基盤層が濁った堆積土として認識できる。その後、遺構の最終確認を目的とする掘り下げを行い、11 月 26 日に SH2075a の貼床層として誤記名で取り上げられた SH2153 床面の遺物に S88 の辰砂鉾石が含まれるに至ったものである。これらを今回 SH2153a に所属するものと取り扱いここで報告することとした。なお、本遺構下段部は当初 SH2243a とされ、高床部が SH2153a、突出部が SD2354a として調査が行われている。

さらに付け加えると、SB2392a は本建物 SH2153a の埋没後に構築されたもので、SP2336a で出土した朱付着の土器 1738（第 225 図）は構築時に本建物から遊離して混在したと推察する。



第 103 図 竪穴建物 SH2153a 出土遺物実測図

<出土遺物>

792 は短頸の広口壺である。頸部がやや膨らみ口縁端部拡張が弱く後期前半古段階に属す。792.5 は長頸壺口縁部片で端部に凹線文の痕跡が残る。同じく後期前半古段階 793 は長頸壺の頸部下端の斜行刺突文帯で後期前半。794 は口縁端部を拡張しない甕口縁部。795 は台付鉢の裾部である。端部拡張がなく凹線文の痕跡が残る。後期前半。796 は大形鉢天部片である。胴部下半から下方に突出し厚い平底を呈す。内面に赤色顔料（朱）が残る。796.5 も同様に安定した平底の壺又は鉢底部である。

S86 は平基式のサヌカイト製打製石鏃。S87 はサヌカイト製打製石剣の基部とした。周辺は敲打によりエッジを潰す。素材面は摩滅が認められ打製石庖丁を転用したものである。

S88 は辰砂鉱石の結晶片である。出土した時点では復元長径 1.6cm の一つの塊状を呈していたが、整理作業中の振動等により破損・分割したものである。分割後の計測値等は表のとおりで、合計重量 1.65g を測る。外表面は細かな凹凸が生じて風化するが、破損部は樹脂状の光沢がある劈開面を残す。微細片を含めた写真や詳細観察分析結果を第 4 章第 6 節 10 に示した。破片のうち⑦は混入した花崗岩片と判明したが、①の一部に石英様の無色鉱物が僅かに嚙合う。分析の結果、アルミニウムが

第 4 表 辰砂鉱石 (S88) 重量構成

番号	重量 (g)	備考
①	0.28	
②	0.29	
③	0.12	
④	0.45	
⑤ + ⑥	0.09	2 粒
⑦	(0.02)	花崗岩片
⑧	0.12	試料採取
⑨	0.22	
別袋	0.08	細粉
合計	1.65	

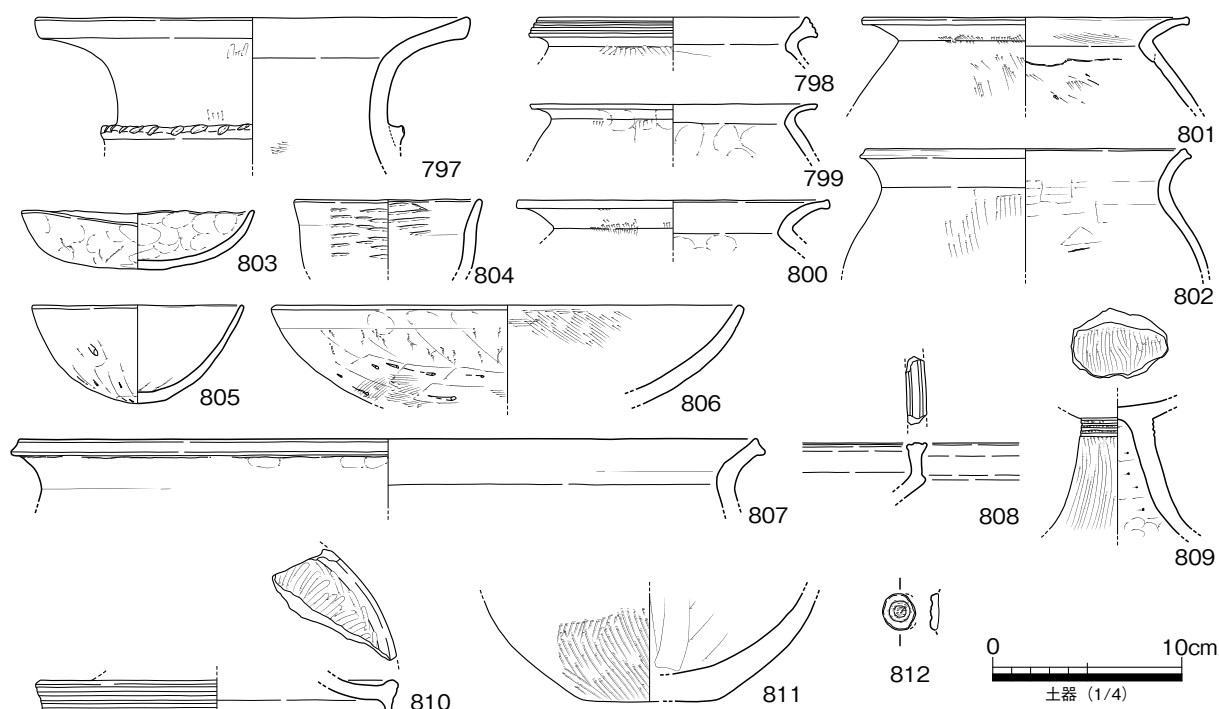
多い非結晶質の鉱物である「アロフェン」と判明した。この鉱物は辰砂とともに生成された鉱物の一部で、辰砂産生特徴を示す材料の一つである。詳細は後章を参照願うが、いずれにしても大きな母岩を含まない辰砂単独の良質の大形鉱石（いわゆる芋辰砂）と評価でき、国産では入手し得ない大きさと考えられる。第 4 章第 6 節 11 の硫黄同位体比分析ではプラスの値が測定され中国産と判定されたこともあわせると、北部九州等を介して入手した大陸からの舶載品と推察する。

T17 は青緑色を呈す K_2O-SiO_2 系カリガラス製の小玉である。色調から銅・鉛・錫を含む着色材と推察する。北側床突出部の壁溝で出土した。

本建物の時期は、出土土器に後期前半古段階より確実に新しいものはなく、遺構重複関係から見ても、後期前半古段階に廃絶した建物と判断しうる。辰砂鉱石の出土は極めて重要で、原産地近辺ではなく消費地で出土した鉱石としては大陸方面からの舶載品の玄関口である北部九州の糸島平野・福岡平野以外では福岡県久留米市田主丸町に所在する筑後川水系の弥生後期拠点集落である水分遺跡（久留米市教委 2016）で出土した辰砂鉱石（辰砂塊）に次いで、二例目であり、北部九州以外では現時点では唯一の出土例である。第 4 章第 6 節に詳しく触れるが、本遺跡出土の土器等に付着した辰砂は硫黄同位体比分析（第 4 章第 6 節 11）の結果その多くが中国産という結果が得られており、ここで出土した辰砂鉱石の分析結果と矛盾しない。よって今回出土した辰砂鉱石は当集落内で土器や石杵を使用して行われた辰砂を原料とする赤色顔料（朱）の精製・生産においての原材料で、遺棄された時期は後期前半古段階と判断した。

(37) SH2220a

2 区中央北端で検出した方形竪穴建物である。遺構の北側は 4 区に広がる。南側には SH2224a が近接するが掘方は微妙に切り合わない。長辺 3.55 m、短辺 3.0 m、深さは検出面から 0.5 m を測る。推定床面積は 10.7㎡。周縁に壁溝を有し床面には基盤層ブロックを含む黒褐色粘土の貼床層を最大厚 0.07



第105図 竪穴建物 SH2220a 出土遺物実測図

で主柱穴は見いだせなかった。攪乱で滅失したとすると、2本主柱の可能性が高い。一方で、掘方より外側に1～1.2mの間隔を空けて8基の柱穴が取り巻く。西側柱穴のみ2mの間隔がある。屋内柱穴と考えれば本建物は平地式の半竪穴建物となり、屋外の外縁施設とみれば竪穴建物を取り巻く柵状の柱列となる。また、その関連性も含めて現状では不明である。床面から浮いて銅鏃片（M116）が出土した。

<出土遺物>

後期前半から終末期までの土器が混在する。床面出土遺物は803・805・806の鉢が床面から出土した終末期の土器である。803は浅い皿状の鉢で器壁が薄く、指押で最終調整を行うもので終末期新段階に位置づけられる。805・806は口縁部の面取りは行わない。なお、812は後期前半新段階の壺又は器台口縁部に貼付された竹管円形浮文の剥離片である。銅鏃片M116は鏃身側縁小片を含む細片群である（写真図版154）。

上記の出土土器の年代より本建物の廃絶時期は終末期新段階と判断した。

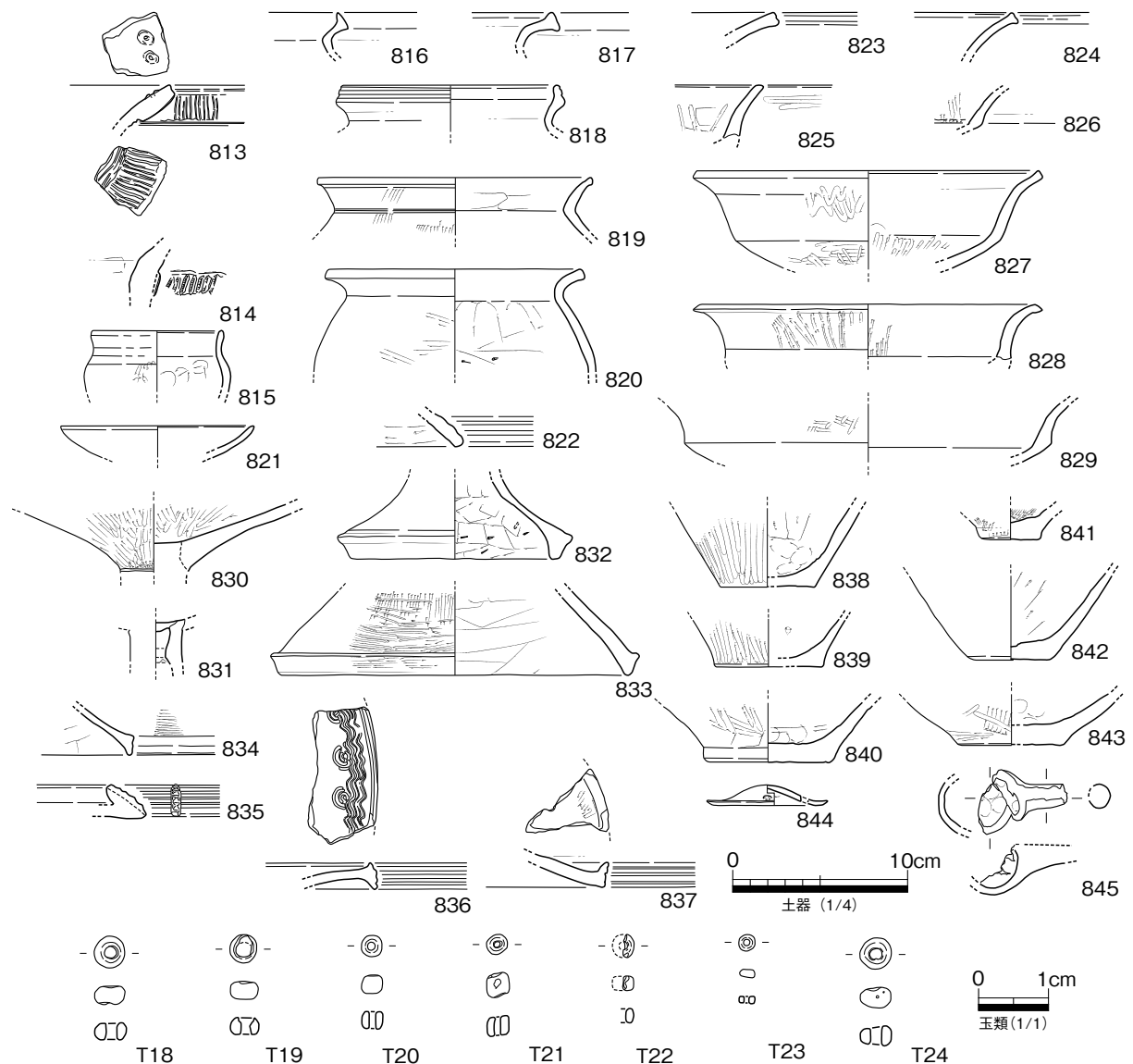
(38) SH2224a

2区北側に位置する多角形の竪穴建物である。多角隅が丸味を帯びることから円形に近い平面形となる。直径は5.1mを測る。推定床面積は20.4㎡。北側はSH2220aに近接して微妙に切り合わず、南はSH2303aに僅かに切られる。どちらの建物とも廃絶年代の差はあるものの、廃絶後の窪みが意識され大きな切り合いが回避されたものと推察する。南東部ではSH2149aと重複したと思われるが、SH2149aが竪穴部をもたない平地式建物であるため直接遺構の切り合いはない。

主柱穴は4基（SP2311a・SP2316a・SP2315a・SP2320a）で柱間は2.1mを測る。中央やや北寄りに長さ2.2m、幅1.5mの範囲に深さ0.03mほどの浅く不定形な段があり、SK2292aとした。その内部に一〇型中央土坑様式の炉跡（SK2308a・SK2309a）が配される。SK2308aは長さ1.04m、幅0.58m、深さ0.09

mで底面付近に薄い炭化物層が残る。SK2309aは長さ0.9m、幅0.5mで深さは0.25mを測る。埋土下部に炭化物塊が含まれ、土器投棄を経て基盤土ブロックを含む土で埋め戻されている。SK2309a及び
 竪穴埋土より炭化物粒0.49gを水洗回収し、燃料材としてコナラ属アカガシ亜属、マツ属複雑管束亜属
 を同定し、同時にモモ核6点を検出した（第4章第2節4）。

浅い段状の土坑SK2292aの外側にはb・eラインの5・6層とした明黄褐色土層を認める。基盤土
 に類似した土層であり、壁溝断面からみて壁板を固定する機能も有した貼床と判断した。要するに
 SK2292a全体がベッド状遺構の下部部であり、その外側は貼床により構築されたベッド状遺構と判断
 した。



第107図 竪穴建物SH2224a出土遺物実測図

<出土遺物>

主な床面遺物は 819 の甕、828・829・832・834 の高杯、836・837 の器台、844 の小形の蓋、845 の土製匙、T20 のガラス玉で、T21～T24 は土坑・柱穴出土のガラス玉である。

813 は土佐地域の影響が強い搬入系の壺である。緩く開く口縁の外面に平らな粘土帯を貼付し縦方向の沈線を密に施し、粘土帯より下に横方向の沈線を $2+a$ 条施すもので、内面にも小形の中央刺突円形浮文を貼付する。土佐地域では中期末～後期初頭を下限とする時期に相当する。814 は頸部に原体刺突突帯文を貼付する壺、815 は小形の短頸壺である。816・817 は後期前半古段階の甕、819 は後期後半古段階を上限とする甕、820 は口縁内面に稜線のない甕で後期後半古段階を下限とする。825～829 は高杯杯部片である。いずれも口縁屈曲の形態で口縁端部はほとんど拡張せず、面取りを行う。822 は台付鉢脚端部で外面に凹線文を施し裾端部は拡張せず丸く収めており、後期後半に属す。

832～834 は高杯脚部片である。うち 833・834 は胎土中に黒雲母片が多数含まれ備中産の搬入品である。

835～837 は器台である。口縁部に凹線文や櫛描文を施す。この特徴は後期後半古相を下限とする属性である。836 は胎土 Hb の土器である。838～843 の底部は比較的安定した平底が多い。

844 の蓋は小形の丸底壺にみられる口縁部穿孔に対応して穿孔を施したものである。また、845 は土製の匙である。柄の一部に丹塗痕跡が残る。

T18～T24 はガラス製小玉である。多くは青緑色を呈すが、T23 のみ淡緑色で異質である。蛍光 X 線分析の結果 Na₂O-CaO-SiO₂ 系のソーダ石灰ガラスと判明した。ただソーダ石灰ガラスはよくコバルトイオンが含まれるが、T23 からは酸化コバルト (CoO) は全く検出されなかった。酸化銅 (CuO) の含有量も少ないことから、分析者は無着色の基礎ガラスを使用したものと推察している (第 4 章第 4 節 4)。出土遺物より本建物の廃絶時期は後期後半古段階である。

(39) SH2303a

2 区東側建物集中域と西側集中域の中間に配された方形の竪穴建物である。一辺 5.1 m で周縁に壁溝を巡らせ、4 本主柱 (SP2379a・SP2378a・SP2380a) で、西側を除く三方にベッド状遺構を構築する床面構造を呈す。推定床面積は 22.8m²。中央やや東寄りに長径 1.1 m で浅い皿状の地床炉 (SK2377a) を備える。主柱穴の掘方が直径 0.5～0.7 m と外の建物と比べ大きいのが特徴である。ベッド状遺構は貼床 (a ライン 2・8 層、c ライン 5 層) で構築し、炉跡下層には大量の炭化物が認められた (c ライン 13 層)。13 層中から 4.2g の炭化物を水洗・回収しサカキ・ケヤキの燃料材を同定した。また、同じ箇所からモモ核 38 点が出土した。

<出土遺物>

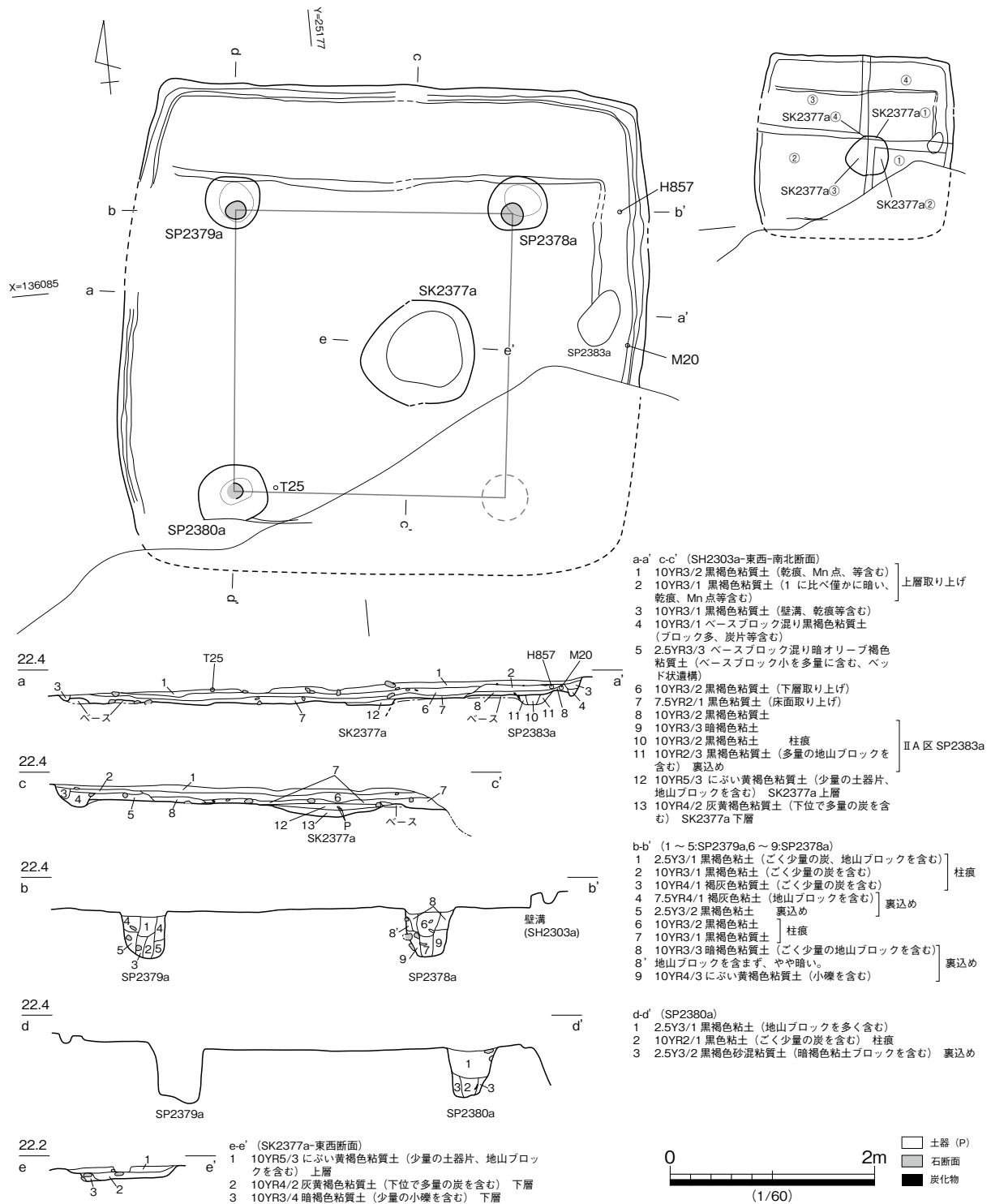
床面で出土位置を記録した遺物は 857 の甕、M20 の鉄鏃、T25 の水晶原石 (自形結晶) である。846～849 は口縁部が斜め上方に直線的に開き端部が斜め方向に面をもつべく大きく拡張する壺で複合口縁壺の影響下で成立した壺の一群である。848・849 は胎土 H の土器である。外端面に鋸歯文を施文するのが特徴で、846・847 は A1 類、849 は B1 類の鋸歯文を施文する。850 は口縁部の拡張が弱い壺で頸部は直線的に立ち上がる。口縁端部に丹塗痕を認める。851 は頸胴部境に断面三角形突帯を貼付し部分的に刻目を施すもので、内面には器形境の緩い稜線が入る。胎土 H の土器である。

852～857 は甕で口縁部が「く」字状のものが多い。一部に口縁部が大きく外反し、内面最上端に窪

みを巡らせる典型的な終末期の特徴を備えた 856・857 の甕がある。853・858・860・862・864・867 は胎土 H である。855 は複数の粘土を使用して成形した痕跡が残る。

直口鉢は 862 が指頭痕を残す小形の丸底鉢で終末期の様相を示すが、863・864 等中大形の直口鉢の口縁端部はどれも面取りしており、終末期古段階の特徴を有す。871 の器台外面にはイネ朶の圧痕を確認した。なお、875 は丹塗土器で備中産の搬入品である。

M20 は柳葉形鉄鏃である。鏃身はほぼ全形を留め、その長さは 5cm を測る。M21 は棒状鉄片である。



第 108 図 竪穴建物 SH2303a 平・断面図